

創価大学  
国際仏教学高等研究所  
年 報

平成29年度  
(第21号)

Annual Report  
of  
The International Research Institute for Advanced Buddhology  
at Soka University

for the Academic Year 2017

Volume XXI

創価大学・国際仏教学高等研究所  
東京・2018・八王子

The International Research Institute for Advanced Buddhology  
Soka University  
Tokyo・2018

# 『カルマ・ヴィバンガ』サンスクリット写本： 「スコイエン・コレクション」断片

工藤 順之

## 0. はじめに

『カルマ・ヴィバンガ』(*Karmavibhaṅga*, abbrev. KV) のサンスクリット・テキストには、ネパールで発見された二つの写本 (A、B) に見られる系統とB写本に附随するC写本が示す系統と二つの伝承が存在する<sup>1</sup> (同じくネパールで新たに見出されたE写本はB写本からの直接の写し、あるいは極めて近い写しであり、系統的に異なるものではない)。これら二つの写本の最も大きな相違は、業報を説明する引用文献の有無である。前者の系統には他文献からの引用があり、後者にはない。また業報の説かれる順序も異なる。

これまでこのテキストについて論じてきたいくつかの先行研究の成果とともに<sup>2</sup>、これらの写本を分類すればおよそ次のようになる。KVを含む所謂「鸚鵡経類」は二類に分けられるが、そのうち第一類は説かれる業報の数が14項目で、「中阿含経」の異訳3種を含む漢訳4本 (Ch-1~4) とパーリ・テキスト (*Majjhima-Nikāya* No. 135)、そして数葉の中央アジア出土『シュカ・スートラ』 (*Śukasūtra*) 断簡からなる。他方、第二類は、第一類から発展し、説かれる業報の数が飛躍的に増加したテキストで、サンスクリット写本のKV (A~Dの写本) や漢訳2本 (Ch-5, Ch-6)、3種のチベット訳 (Tib-1~3) からなる。この第二類では更に、後半の大部分の節が付け加えられた後で業報を例証する、他文献からの引用が挿入される。引用を含むテキストが {A・B写本, Tib-1} である。引用を含まないC写本、漢訳2本、チベット訳2本 (Tib-2, Tib-3) は、内容の構成上 {C写本, Ch-6, Tib-3} と {Ch-5, Tib-2} とに分けることが出来る。

さて、サンスクリット写本で言えば、A・B (・E) 写本は業報の例証として他文献からの引用を含む、最も拡大されたテキストの写本で、その内容から推測すると、正量部のテキストと類推されている他の文献との親縁性からみて正量部系のテキストと見なしうるものである<sup>3</sup>。他方、C写本は引用を含まない段階のテキストを

<sup>1</sup> KVのテキスト伝承については既に工藤2005で論じた。A, B写本についてはKudo2004参照。また、C写本は最初Fukita1990において対応する漢訳 (= 『分別善惡報應經』(T81, vol. 1, 895b26–901b19) [= Lévi: Cht; Kudo: Ch-6]) と「ロンドン写本カンギル」所収のチベットテキスト (no. 287) と対照させたテキストが出版され、Kudo2004: 217–224には若干の読替を加えてサンスクリットテキスト同士を対照させた。D写本はA写本に付随するテキストで、Kudo2004: 225–227に転写テキストを挙げた。更に、その後発見されたE写本はKudo2006b, 2007にテキストを公開した。そこで論じたように、この写本はB写本の写しであることが判っている (Kudo2006b: 44–48)。

<sup>2</sup> 例えば、並川1984, 1985, Fukita1990, 岡野2002。

<sup>3</sup> 正量部所属の可能性については、先に挙げた並川1984, 1985に論じられる。そこでは引用文献が

伝える。両系統が異なるのは引用の有無・節の順序だけではなく、列挙される功德の内容も相違し、特にC写本第7節に残る「避難所の施与」で説かれる天界等に関わる記述はこの系統が持つ伝承がA B写本系とは決定的に異なっていたことを示していて<sup>4</sup>、そのC写本にのみ残る記述は有部系資料に見られる思想との関係が指摘されている<sup>5</sup>。伝承が部派によって異なっていたとの前提に立てば、明らかにC写本は有部系伝承として、独自にテキストを形成していたことになる。

これらのサンスクリット写本は全てネパールで発見されたものである。我々が二つの異なる伝承の存在を断定することに関して、ネパール写本という大きな資料群以外にも同様の事例が見出せるならば、つまり少なくともAB写本とは異なるC写本の形式・内容と類似した別の写本が見出せるならば、テキスト形成史の或る一点だけでなく、地域的な広がりの中で、あるいはテキストの伝播という観点からそれらの結びつきを考察することができるのではないかと期待できよう。（伝承の異なるBとCの写本が同じバンドルで保持されていたという謎は残ったままである。）

幸いなことに、数も少なく破損した断片ではあるが、「スコイエン・コレクション」(Schøyen Collection = SC)として収集されていた写本群の中にKVの写本の一部と思われる断簡が発見された。その内容は、断片的ではあるのだが、ネパール写本から得られたKVのテキストと類似した構成を有していて、テキストとして復元出来る箇所もその主題は共通している。しかし、これらの断片から得られるテキストは写本Cと同様に一切の引用を有さない。また節の順序も他のいかなるテキストとも異なる。つまり、KVのテキスト形成史に密接に関係すると思われる断片が、ネパール以外の地、即ち北西インドに存在していたことが確実である。以下、それについて検討しよう<sup>6</sup>。

## 1. 「スコイエン・コレクション」の写本断簡

「スコイエン・コレクション」とは今では言うまでもなく、ノルウェーの実業家マーティン・スコイエン氏が収集した文字資料の全体を意味するが、特にここでは仏教資料に限定してそう呼ぶことにする。多くのものがバーミヤン渓谷東部ザルガラーン地区にある石窟寺院跡から出土したものと推定されている。小さな破片を含めると一万点以上になるその膨大な写本断簡のうち、KVに関係するものは同定されているだけで僅か7点に過ぎない。そしてそれらも完全な一枚として残っているのではなく、ほんの極く一部だけが残る断片である。文字部分の摩滅もあって、

---

現存するいかなるテキストに対応するのかという観点から、対応する文献の有無によって消去法的に正量部所属の可能性が指摘された。岡野 2002: 225–229 では十不善業道の結果として「胡麻・砂糖・黍・乳製品の消失」があるという記述が、この『カルマ・ヴィバング』と正量部文献（『マハー・サンヴァルタニー・カタール』）のみに残ることを指摘し、『カルマ・ヴィバング』=正量部所属を「有力な仮説」とする。

<sup>4</sup> C写本が有部系である可能性を論じたのが、Fukita 1990 である。そこでは、「避難所の布施」を説く節 (MS[C] §\*7) にある三界諸天を列挙する部分に、色界に十七天を挙げる箇所に着目し、『大毘婆沙論』の記述を基にこの数を挙げるのがカシュミール有部ではなく、ガンダーラ有部であることを指摘する (Fukita 1990: 9–11 and fn. 54–59)。

<sup>5</sup> 写本Cが他の2写本とは異なっている点について、その内容が「ロンドン写本カンギュル」ときわめてよく一致することが指摘されている (Fukita 1990: 11–13)。この写本カンギュルはKVのチベット伝承で言えば第3の系統を伝えるものであり (Simon 1970)、更にこのカンギュルは戒律部所収文献の配列から根本説一切有部の伝承に近いことも指摘されている (Eimer 1987参照)。簡単には工藤 2005: 107, fn. 27 参照のこと。

<sup>6</sup> 一部は工藤 2005 にて報告した。また、2005年の International Association of Buddhist Studies の第14回大会 (ロンドン) にて口頭発表した。

文字の痕跡のみが辿れるだけの部分もあり、テキストを完全には復元出来ない。しかし、それらを組み合わせることが可能で、二枚のフォリオから分かれたものであることが分かった。

現在までに判明している KV（或いは KV に密接な関係を持つテキスト）の断片は以下の通りである<sup>7</sup>。

SC 2382/49a, 252, 255, 258a, uf1/1b, uf19/1b, 176.

これらの七断片は全てゲッティンゲンのクラウス・ヴィレー博士 (Klaus Wille) によって予備的にテキストのローマ字転写がなされ、そのうち六つの断片に関しては博士によって KV と関係するものと同定されたものである。残る一つの断片(176)は筆者が上記の断片と組み合わせることができることを確認した。

七つの断片は全て樺皮(birch-bark)を素材とし、片面のみが残る。おそらくは素材の性質故、即ちもう片面が剥離したものであると思われる（残っている側が表か裏かはわからない）。文字は 6 世紀以降の “Gilgit/Bamiyan Type I” に分類される。

内容的には冒頭の因縁譚の一部と仏塔への施与によってもたらされる功德を扱う節が残されており、4 節にまたがっている。そのうち 3 節は施与するものが特定できる。そして一つのものの施与によってもたらされる功德は十ずつ列挙されている。ところが、KV に見られるような教説を例証する為の他文献からの引用は一切存在せず、一つの施与の功德を説いた後すぐに次の節が始まる。このような例証を伴わないサンスクリット・テキストは C 写本と同じである。

## 2.1 転写テキスト

### 2.1.1. SC2382/49a.

SC2382/49a は KV 冒頭の因縁譚に対応するテキストを残している。A 写本と B 写本とでは読みに違いがあつて、SC 断片は A 写本にのみ見られる読みに対応している。対応する箇所を下線で示す。

#### SC 2382/49a:

a: /// +++ [su]vicitrakle[ś]. ... [r]. ... [tt]. [s]u .. +++ ///  
 b: /// v. [t]ā śubhasya māṇavasya taudeyaputra[s]ya karma s[v]. ///  
 c: /// +++++ m̐ + .. +++++ ... [s].. .. + + ///

#### Text:

(a)(vicitrakarma) suvicitrakle[ś](ā) (vicit)[r](aci)[t](rā) [s]u(vicitradeśanā | yathoktaṃ Bhaga)(b)[v](a)[t]ā śubhasya māṇavasya taudeyaputra[s]ya karma[sv](akān ahaṃ māṇava satvān vadāmi )

Lévi 1932: 29.31–30.3; A7v.4–8r.1; B5r.1–2 [= Kudo 2004: 26–27]; E3v.1–3 [= Kudo 2006: 56]

A7v.4–8r.2: "tena hi māṇava śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca maṇasikuru bhāṣiṣye | vicitrakarmā suvicitrakleśā vicitracitrā śuvicitradesanā |"

<sup>7</sup> ここで当該写本断簡の写真及びテキストのローマ字転写を快く筆者に提供してくれた「スコイエーン・コレクション」の研究グループの代表者であるオスロ大学のイエンス・ブローリック教授 (Jens Braarvig)、佛教大学の松田和信教授、ゲッティンゲン・アカデミーのクラウス・ヴィレー博士 (Klaus Wille) に感謝したい。ブローリック教授にはこの資料を用いた本稿の発表許可も頂いた。

yathoktaṃ Bhagavatā Śukasya mānavasya Taudeyaputrasyāśvalāpanasya mānavasya |  
"karmasvakān ahaṃ māṇava satvān vadāmi <> karmadāyādān karmayonīn karma-  
pratiśaraṇān karma māṇava satvān vibhajati | yad idam hīnotkṛst(a)[madh]yamatāyām ||"  
B5r.1–3: tatra Bhagavāṃ Śukaṃ mānavakaṃ Taudeyaputram idam avocat |  
"karmavibhaṅgaṃ te mānavaka dharmaparyāyaṃ deśayiṣyāmi | tat śṛṇu sādhu ca suṣṭhu  
ca + + + + + + + "  
"eva[m] Bhagavann" iti Śuko māna<va>ko <Tau>deyaputro Bhagavataḥ pratyaśauṣīt\* ||  
Bhagavān idam avocat\* ||  
"karmasvakān ahaṃ māṇava satvān vadāmi || karmadāyādā(n) karmayon(īn) karmma-  
(pratiśaraṇān karma mā)ṇava satvān vibhajati || yad idam hīnotkṛṣṭamadyamatāyām ||"  
Cf. E3v.1–3: tatra Bhagavāṃ Śukaṃ mānavam Taudeyaputram idam avocat\* |  
"karmavibhaṅgaṃ te māṇava dharmaparyāyaṃ deśayiṣyāmi | tac chṛṇu sādhu ca suṣṭhu  
ca manasi<kuru> bhāṣiṣye 'haṃ te |"  
"evaṃ Bhagavann" iti Śuko mānavas Taudeyaputro Bhagavataḥ pratyaśauṣīt\* |  
Bhagavān idam avocat\* ||  
"karmasvakān ahaṃ māṇava satvān vadāmi || karmadāyādā(n) karmayon(īn) karmapra-  
tiśaraṇā(n) karma māṇava satvān vibhajati <> yad idam hīnotkṛṣṭamadyamatāyām (l)"

「鸚鵡経類」に属する他のテキストにおける該当箇所は以下の通りである。

Pāli Cūḷakammavibhaṅgasutta [203.4–6]<sup>8</sup>:

kammasakkā māṇava, sattā kammadāyādā kammayonī kammabandhū kammapaṭisaraṇā.  
kammam satte vibhajati yadidaṃ hīnappanītatāyāti;

Ch-2 [704c25–27]:

世尊答曰。「彼衆生者因自行業。因業得報。緣業依業業處。衆生隨其高下處妙不妙。」；

Ch-3 [889b21-22]:

「此摩牢。衆生因緣故。因行故緣行故作行故。隨衆生所作行。令彼彼有好惡高下。」；

Ch-4 [588c29-589a1]:

佛言。「淨意。汝今當知。世間衆生。所作因行。有差別故。其所得果而各有異。」；

Ch-5 [891a25–26]:

佛告首迦。「一切衆生。繫屬於業。依止於業。隨自業轉。以是因緣。有上中下差別不同。」；

Ch-6 [896b23–27]:

佛告輸迦長者子言。「善哉善哉。汝應諦聽善思念之。今爲汝說。一切有情作業修因善惡不等。所獲報應貴賤上下。種族高低差別亦殊。」；

Tib-3. (London no. 202. 304a5–7)<sup>9</sup>

bram ze'i khye'u de'i phyir legs par rab tu nyon la (304a6) yid la zung shig dang bshad  
do | bram ze'i khye'u sems can rnams ni las bdag gir 'gyur ba las kyī bgo skal la sbyod  
pa | las kyī skye gnas can las la ston pa ste | bram (304a7) ze'i khye'u sems can rnams ni  
las kyis 'di lta ste | dman pa dang | mchog dang 'brid dang | mchog dang mthon po dang  
| dma' ba dang | ngan pa dang | bzang po rnamsu rnam par phy'e'o ||

<sup>8</sup>. また AN V. pp. 288, 291 にも同様のことが記されている (cf. AN III. pp. 72–75, 186; V. p. 88)。

9. チベット訳の中で因縁譚を含むのは Tib-3 だけである。ここではそのうちのロンドン写本カンギュルを引く。

SC2382/49a は KV 冒頭の因縁譚に対応するテキストを残している。A写本とB写本とでは読みの違いがあつて、SC 断片はA写本にのみ見られる読みに対応しているが、A/B写本の違いは次のようにして説明できる。

シュカは世尊の教え通りに自分の家の白狗から財宝の在処を知ることが出来、そのことで白狗が嘗ての父であることを知って世尊に帰依することになる。そこでシュカは世尊に業によって人々に様々な違いが生じていることを問う。世尊は彼の問い答えるが、そこからが二つの写本で異なる。

A写本では次のようになる：

「では梵志よ、よく聞き、よく覚えておくがよい。話してあげよう。」

つまり、様々な業があり、よき種々の煩惱があり、種々の citra があり、よき種々の教えがある

このように世尊によってアシュヴァラーヤナ姓の梵志、シュカ・タウデーヤプトラは言われた。

(世尊は語った)「梵志よ、私は人々を業の所有者と呼ぶ。彼らは業の相続者、業を胎とし、業を所依とするものである。梵志よ、業は人々を区分する、即ち劣・優・中間にである」

他方、B写本の読みでは次のようになる：

そこで世尊はシュカ・タウデーヤプトラにこのように言った：

「業の分別という経説を、汝梵志よ、説いてあげよう。よく聞き、よく（覚えておくがよい。話してあげよう）」

「わかりました」とシュカ・タウデーヤプトラは世尊の言葉に耳を傾けた。

世尊はこのように語った「梵志よ、私は人々を業の所有者と呼ぶ。彼らは業の相続者、業を胎とし、業を所依とするものである。梵志よ、業は人々を区分する、即ち劣・優・中間にである」

共通する部分を下線で示した (SC 断片との対応は二重下線)。世尊の最初の言葉が大きく異なっているが、B写本にある「業の分別云々」という文は、ウッデーシャが終わった後のまとめの句として「以上が業の分別という経説のウッデーシャである」(Lévi 1932: 32.3; B6v.4 = Kudo 2004: 35) とあることに連動していて、この写本のテキストとしては一貫性を維持している。他方、A写本はウッデーシャ末のまとめの文は「これが業の分別のウッデーシャである」(A10v.3 = Kudo 2004: 34)とあつて、*dharmaparyāya* とは述べていない。そうした違いが最初の文に現れているのである。もう一つの違いである世尊の最初の言葉を受けたシュカの答に相当する部分では、A写本ではおそらくはバラモンの家系を付加して述べたものと思われ、このようなシュカの属性ともいえる内容は他のヴァージョンには見出せない。SC 断片でもこの部分はない。したがって、偶々A写本のテキストに混入したか、或いはB写本とは異なるそうした伝承があったかであろう。

この部分にはテキストの発展の中で生じた違いが残っているといえるのだが、何に基づく違いであるのか（例えば部派的な伝承の違いを受けているのかどうか）は分からない。ただ、SC断片は一部分とは言えA写本と同じ読みを残しており、こちらの方がB写本の読みより古いものであることは確かである。但し、それはA写本全体がB写本より古いということを証明するものではない。

もう一点、興味深いことがある。それは主人公の名前が SC 断片には *Śubha* と残っていることである。これまで見つかったサンسكريット写本では名前は全てが *Śuka* となっているのに対して、パーリ語では「スバ」(*subha*)とあり、この違い

さて、残りの六断片であるが、その内の五断片は一枚のフォリオを構成することが分かった。SC 2382/uf1/1b だけはどの部分に接合すべきか不明である。僅かに残る単語から同じフォリオに属する可能性が高いが、確定的なことは言えない。後で示すように、接合が可能となったため六行写本であることが判るので、それぞれの断片の残るテキストが何行目であるのかが確定する。

4    ///. ○ t. kāy. .. + + + + + ///  
5    ///ya .i ime daśa dharmā upa .. + + ///  
6    /// + śyati kā .ā d daurgandhyam navāy. ... ///

1 /// hābho {•}go bhavati svarge upapadyate k. ip[r]. ///

2 /// lḡusvaro bhavati raṃjanīyasvaro bhavati praṃ ///

3 /// ..[i]Orvāyati ime daśa dharmā u .. ///

4 /// ++ (○) .. ++ daurgandhyam navāy. ///

3 /// pac[i]t[ā bhav]at[i] ghaṇṭapradā .. +  
+ + + +

4 /// .. ti kāyāt sogandhyam vāyati digvidikṣu .. .. guṇa[gan]dh. + + + + + + + + + ..  
m. v. dhān. ... [t]. ..

5 /// .. .i .. . + + + || tatra katame daśa dharmā upacitā bhavaṃti puṣpapradānena puṣpa-  
bhūto bhavati lokasya di

6 /// + + + + + .. ndhyaṃ vāyati digvidikṣūdāro guṇagandho vāya punaḥ punar i[t]  
dhar[m]aiḥ s. ā .. ma .. dhānam bha

1    /// + + + + + ṣu kuleṣūpapadyate ma .. + ///  
2    /// .. ghaṇṭapradānena ratnasvaro bhavati .. .. + + ///  
3    /// + .. vati svarge upapadyate kṣipraṃ ca parini ○ ///  
4    /// + + ..m .. [jā?] .. .. + + + + ..m p[ra]tilabha{•} ///

2    /// .. .. n. gandhapradānena ///

先ず、258a と 252 が左-右として接合する：

496

記号 -i が見え、両断片はここで上下に結合し ni となる (parinirvāyati)；両断片とも 3～4 行目に綴じ穴があるが、それを囲む二重丸の円周が奇麗に繋がる。

更に S176 が 258a + 252 の下に結合する：

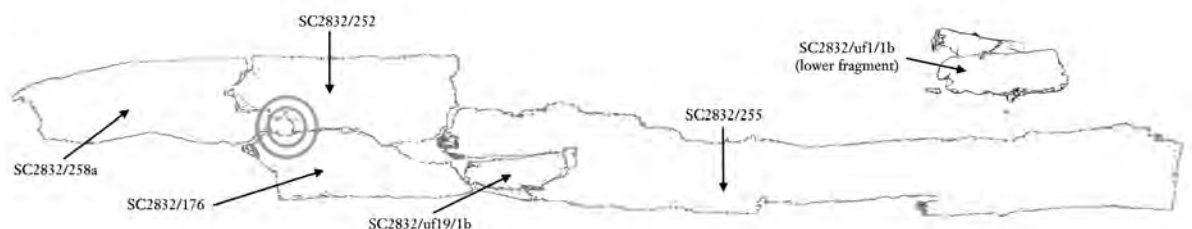
252A4 にある綴じ穴の直ぐ後に母音記号 -e が残っているが、176A4 の綴じ穴の直ぐ後にある基字 t- と一文字を構成する (pratilabhate)；それぞれ同じ行で 4 文字目に 252 では [d]au とあるが、176 には基字 d の左下部分があり、文字が完全に復元できる；176A4 始まり部分に綴じ穴とそれを取り囲む二重丸があるが、258a + 252 の丁度真下に結合することで二重丸の円周全体が形となる。

255 と uf19/1b が接合する：

255 左端の下 2 行分 (255A5-6) は丁度入り組んだ湾のように内側に欠けているが、その切れ込み部分に uf19/1b が埋め込まれる。255A4 の 7 文字目に ndh[y]am とあるが、結合文字の下に延びている -y- の一部が uf19/1b.A4 に残る；uf19/1b.A5 の 4～5 文字目に g[a]ndh[a] とあるが、その上部線が 255A5 の 4～5 文字目にある；uf19/1b.A5 末に僅かなインクの痕跡が残るが、これは 255A5 にあるダブル・ダンドの左側縦線の一部で、両断片の切れ目は完全に一致する；uf19/1b.A6 最後に g- とあり、その右側の縦線部分が欠損しているが、それが 255A6 最初の欠損文字と結合して ga という文字全体となる。

255+ uf19/1b が 258a + 252 + 176 の右に接合する：

252A3 最後に [p] があるが、これは 255A3 冒頭の [p] の一部であり [pa] を構成する；252A4 最後には基字 [y]- の左側部分だけが残るが、255A4 冒頭の部分欠損文字と合わせて [ya] の形全体となる；上記のそれぞれ 2 行分は 252 右と 255 左の切れ目が完全に一致する；uf19/1b は位置的に 176 と連続するのだが、176A6 最後に見られる文字 [y] の右半分から後の部分が一皮分剥離しており、丁度その剥離した部分が uf19/1b.A6 になる（ここに見られる文字の痕跡は -ā の形であろう。したがって、176 と uf19/1b を接合すると yā が回収できる）。



以上のような接合関係をそれぞれの断片の行と対応させて、このフォリオを再構成すると次のようになる。

- 1 258aA1 + 252A1
- 2 258aA2 + 252A2
- 3 258aA3 + 252A3 + 255A3
- 4 258aA4 + 176A4 + 252A4 + 255A4 + uf19/1b.A4
- 5 176A5 + 255A5 + uf19/1b.A5
- 6 176A6 + uf19/1b.A6 + 255A6

このようにして片面 6 行の一枚分のフォリオが約 3 分の 2 の大きさに回収できたが、左端に欠損があるかどうかは何とも言えない。フォリオの右端は 255A4-6 によって欠損なしに残っていることが明らかである。ところが残念なことに、フォリ



[illegible]

498

abhirūpo bhavati | susvaro bhavati | manojñabhāṣī bhavati | kalaviṅkarutabhāṣī bhavati<sup>13</sup> | ādeyavākya  
bhavati | nityaṃ saṃpraharyaajāto bhavati<sup>14</sup> | punaḥ punar ānanda(m) śabdaṃ<sup>15</sup> śṛnoti |  
svargeṣūpapadyati<sup>16</sup> | mahābhogaś ca bhavati | kṣipraṇ ca parinirvāti |  
ime daśa guṇā ghaṇṭapradānasya<sup>17</sup> ||  
引用 a) Viśākhā からの世尊への問い (Lévi 87.15–88.2; A53r.–v.1; B31r.3–4).

SC § \*3. tatra katame daśa dharmā upacitā bhavanti gandhapradānena |)

++ (4) ++++ ..m .. [jā?] .. .. ++ ++ ..m p[ra]tilabhate kāyā(d) daurgandhyaṃ na  
vāy(a)ti kāyāt s(au)gandhyaṃ vāyati digvidikṣ(ūdāro) guṇagandh. ++++++ ..  
m(ahā)dhān(aṃ) bh(a)v(a)t(i) m(a)(5)(hābhogo bhavati svarge upapadyate kṣipraṃ ca  
parinirvā)tyati <|>

ime daśa dharmā upac(itā bha)v(a)nti gandhapradānena ||

KV § 76 gandha (Lévi 1932: 103.1–13; A59v.1–3; B35r.1–2 [= Kudo 2004: 208–211]).

katame daśa guṇā gandhapradānasya | ucyate |  
gandhabhūto bhavati lokasya | ghrāṇendriyaṃ viśudhyati | kāye daurgandhyaṃ apaiti | saugandhyaṃ  
prādurbhavati | daśa diśaḥ śīlagandhaḥ pravāti | abhigamanīyaś ca bhavati | lābhī ca bhavati iṣṭānām  
dharmānām | mahābhogaś ca bhavati | svargeṣūpapadyati<sup>18</sup> | kṣipraṇ ca parinirvāti |  
ime daśa guṇā gandhapradānasya ||  
引用 a) Cakravartīsūtra 一節 (Lévi 1932: 103.6–12; A59v.3–60r.1; B35r.2–4).

SC § \*4. tatra katame daśa dharmā upacitā bhavaṃti puṣpapradānena <|>

puṣpabhūto bhavati lokasya di (6) ++++++ śyati kāyād  
daurgandhyaṃ na vāy(at)i kāyāt\* saugandhyaṃ vāyati digvidikṣūdāro guṇagandho vāya(ti)  
punaḥ punar iti dharmaiḥ s. ā .. ma[va?]dhānaṃ bha(vati)

KV § 74 puṣpa (Lévi 1932: 100.11–101.7; A58r.4–v.1; B34r.3–4 [= Kudo 2004: 204–205]).

katame daśa guṇā muktapuṣpapradānasya | ucyate |  
puṣpabhūto bhavati lokasya | ghrāṇendriyaṃ viśudhyati | kāye daurgandhyaṃ samapaiti<sup>19</sup> |  
saugandhyaṃ prādurbhavati | daśa diśaḥ śīlagandhaḥ kṣāntiṃ gacchati | abhigamanīyaś ca bhavati |  
lābhī ca bhavati iṣṭānām dharmānām | mahābhogaś ca bhavati | svargeṣūpapadyati<sup>20</sup> | kṣipraṇ ca  
parinirvāti |  
ime daśa guṇā muktapuṣpapradānasya ||  
引用 a) Karṇesumana のアヴァダーナ (Lévi 101.3–6; A58v.1–2; B34r.5–6).

### 2.1.3. SC 2382/uf1/1b.

#### SC 2382/uf1/1b-Aa:

a /// takāya susvaro bhavati ///

b: /// + .[i/e?] + .. .. [i?] .. [ā] .. [m?] ///

この断片の一行目には “susvaro bhavati” という文章が残る。susvara という語は音  
に関係するから、これはおそらく KV §65 「鐘の施与」 (ghaṇṭapradāna) によってもた

13. B にはこの句なし。

14. B にはこの句なし。

15. A には śabdaṃ なし。

16. B: °papadyate.

17. B にはこの終わりの句なし。

18. B: svarge copapadyate.

19. A: “samapaiti: disappears”; B: “jahāti (3rd, sg. form of hā, cl. 3): removes.”

20. B: svarge copapadyate.

らされる果報の一つであると思われる<sup>21</sup>。そうすこのフォリオの二行目（即ち、252A2）の右側の何処かに置かれるはずである。また uf1/1b の二行目には一部の母音記号と文字の上部だけが残っている。これはフォリオの三行目になるはずであるが、それに相当する部分は 255A3 で欠けているものの丁度定型句に当たる部分なので復元が可能である。両者を並べて比較する。

uf1/1b.b: /// + .[i/e?] + .. .. [i?] .. [ā] .. [m?] ///

255A3: ghaṇṭapradā(nena || tatra katame daśa dharmā upacitā bhavanti gandhapradānena ||) ++

uf1/1b の読みが確定できないことも大きな理由であるが、ここで判別できる文字の母音の散らばり方が 255A3 と全く異なっており、とても当てはまるようには思えない。そうすると、uf1/1b の一行目をフォリオの二行目に当てること自体が正しくないことになる。

フォリオ全体から見てみると、大きく欠損している箇所は一～二行目右側 3 分の 2 と、右半分の三行目と四行目の一部、そして五～六行目の左側（綴じ穴より前の部分）である。それら欠損している部分で復元が可能なのは一行目後半、三行目後半、五行目冒頭である。それらは全て定型句であり、復元できるテキストは確実なものである。したがって、果報の内容を説く uf1/1b の一行目にある *susvaro bhavati* という文章が入るべき位置は二行目後半と、四行目の一部、六行目冒頭しか可能性はない。その内、六行目には当て嵌められない。なぜなら、uf1/1b の二行目が 6 行のフォリオの七行目になってしまうからである。また、四行目の一部にも当て嵌まらない。何故なら、四行目の欠けている部分の下五行目には一切欠損がないからで、uf1/1b の二行目が 100% 重ならないからである。したがって、唯一可能性があるのはフォリオ二行目後半だけであるが、先に見たようにそれも無理であった。uf1/1b の二行目の読みがより正確になれば、あらためて考える余地も生まれるであろうが、現時点では「内容的には結合すべき断片であるが、フォリオにおける位置は不明である」ということになる。

## 2.2. 定型句の比較

### 2.2.0 節順序の対応

接合した 1 枚のフォリオから主題が分かる節は 3 つである。

§ \*2 鐘 *ghaṇṭa* (1~3行. 単語自体は 258aA2 [冒頭]と 255A3 [結句]にある)

§ \*3 香 *gandha* (3~5行. 単語は 255A5 + uf19/1b-a [結句]にある)

§ \*4 花 *puṣpa* (5行~. 単語は 255A5 [冒頭]にある)

SC 断片では KV の節番号でいう §§ 65⇒76⇒74 という順序でテキストが残っていることが判明する。他のヴァージョンとの節の対応を比べて見よう。

SC	KV	Ch-5	Ch-6	Tib-1	Tib-2	Tib-3
鐘 <i>ghaṇṭa</i>	65	68	79	82	66	61
香 <i>gandha</i>	76	73	85	88	71	67

<sup>21</sup> *susvara-* という語は KV では § 65 「鐘の布施」の果報部分にあるが(Lévi 87.11; A53r.2; B31r.2 = Kudo 2004: 184–185)、もう一箇所 § 63 「如来の塔に敬礼すること」にもこの単語が現れる(Lévi 84.2; A52r.2; B30r.6 = Kudo 2004: 180–181)。しかし後者に対応するとは思われない。

花 puṣpa 74 73<sup>22</sup> 82 85 68 64

SC 断片の節の順番は「鸚鵡經類」に属するいかなるヴァージョンにも一致せず、この断片が KV に関係するものであるとしても現行の梵本 KV とは異なるものであることは明白である。引用を欠くという点では写 C 本と同系になるのだが、果たして節の順序が同じであるかどうかは分からない。何故なら C 写本は SC 断片が有する節を持たないからである。但し、C 写本に残る範囲ではその節の順序は Ch-6 と Tib-3 と同じであることが分かっているので、それを考慮すると SC 断片はこれまでのサンスクリット写本のどれにも対応しないことが確定する。

## 2.2. SC 断簡の特徴 定型句

片面 6 行の写本であるが、4 つの節にまたがったテキストを残している為、功德を列挙していく際の定型句が次のように回収できる。

- (1) 節の冒頭が “tatra katame daśa dharmā upacitā bhavanti XX-pradānena” で始まること (5 行目 = 255A3)
- (2) 節の終わりが “ime daśa dharmā upacitā bhavanti XXpradānena” で終わること (3 行目 = 252A3; 5 行目 = 176A5)
- (3) 項目列挙の最後に “mahābhogo bhavati svarge upapdyate kṣipraṃ parinivāyati” が挙げられること (1 行目 = 258aA1 + 252A1; 3 行目 = 258aA3 + 252A3).

### 2.2.1. (1) 冒頭の定型句

冒頭の定型句について他のヴァージョン (A~C 写本、漢訳、チベット訳) と対比させよう。

- SC: tatra katame daśa dharmā upacitā bhavanti XX-pradānena
- A: katame daśa gunā XXpradānasya | ucyate | 64–67, 70–79  
katame daśa anuśamsā XXpradānasya | ucyate | 62–63, 68–69  
daśa XX-[nom. pl] katamāni daśa | ucyate | 80
- B: katame daśa gunā XXpradānasya | ucyate | 66, 70–74, 77–79  
katame daśa anuśamsā XXpradānasya | ucyate | 62–65, 67, 69, 75<sup>23</sup>  
daśāanuśamsā XXpradānasya | katame daśa | 68  
daśa XX-[nom. pl] katamāni daśa | ucyate | 80
- C: daśa anuśamsā XXpradānasya | katame daśa | 2, 5–8<sup>24</sup>  
daśa anuśamsā XX-loc. case | katame daśa | 3–4, 9
- Ch-5: 若有衆生。奉施XX。得十種功德。
- Ch-6: 若復有人施XX。獲十種功德。何等爲十。
- Tib-1: de bzhin gshegs pa'i mchod rten la XX dpul ba'i phan yon bcu yod de | bcu gang zhe na |
- Tib-2: yang dag par gzhegs pa'i mchod rten la XX phul na | legs pa bcu thob par 'gyur te | bcu gang zhe na |
- Tib-3: de bzhin gshegs pa'i mchod rten la XX phul ba'i phan yon bcu ste | bcu gang zhe na |

A/B 写本には「どのようなXXの十の功德があるのか。答える」(katame daśa ... | ucyate) とあり、いわば問答の形を備えている。C 写本では「十の功德がある。その

<sup>22</sup> Ch-5 では「香華」というようにして香料と華との布施が一括して述べられている。

<sup>23</sup> § 76 については欠損しているために不明である。

<sup>24</sup> 但し § (7) は「十」ではなく「多くの(bahula)」である。

十とは何か」(daśa ... | katame daśa)とあり、Ch-6 とチベット訳3種も同様の表現となっている<sup>25</sup>。Ch-5 は「十の功德がある」という肯定表現で終わっていて、あらためての質問文を含んでいない。SC 断片は「どのようなXXの十のダルマがまとめられるのか」(katame daśa ...)という最初の問いの部分だけしかなく、直ぐに十項目が列挙される。しかし、その文章は他のヴァージョンと比較して最も丁寧な構成になっている。

### 2.2.2 (2) 節末の定型句

結句表現はほぼ一致していて「これらがXの施与による十の～である」とある。

- SC: ime daśa dharmā upacitā bhavanti XXpradānena  
 A: ime daśa guṇā XXpradānasya || 65, 67, 69–79<sup>26</sup>  
     ime daśa anuśamsā XXpradānasya || 63–64, 68  
     ime daśa guṇā anuśamsā XXpradānasya || 66<sup>27</sup>  
 B: ime daśa guṇā XXpradānasya || 65  
     ime daśa anuśamsā XXpradānasya || 63–64, 79<sup>28</sup>  
 C: ime daśa anuśamsā XXpradānasya || 2, 4–6, 8  
     ime daśa anuśamsā XX-loc. case || 3, 7<sup>29</sup>  
 Ch-5: 是名奉施XX得十種功德  
 Ch-6: 如是功德。施XX獲斯勝報。  
 Tib-1, 3: bcu po de dag ni de bzhin gshegs pa'i mchod rten la XX phul ba'i phan yon o.  
 Tib-2: 無し

冒頭の句と結句とが異なっているのはA写本では § 64 (guṇa/anu°), 66 (guṇa/guṇa + anu°), 69 (anu°/guṇa) であり、B写本では § 65 (anu°/guṇa), § 79 (guṇa/anu°) で残りは一致するか (§§ 63–64)、結句を持たないものとなっている。

冒頭と末尾の定型句における以上のような表現上の違いは、伝承における段階的な発展の違いを反映したものと理解できる。即ち、説かれる業報項目の増加、業報項目の例証として他文献を引用することに伴う節の順序の変更とそれに際して行われたであろう表現の整形の混乱をそれぞれが残しているのである。A/B写本に guṇa と anuśamsa が共存していて、同じ節の冒頭の句と結句とで違っていることはそうした整形が一貫して成されなかったために生じた齟齬であり、他方C写本或いはSC断片では一貫して整形されていたものと推測される。

上記二つの定型句での違いは、構文のみならず、そこに用いられている語にも見出せる。何かを施与することによってもたらされる内容をそれぞれ以下のような単語で表現している：

- SC: 十のダルマ (daśa dharmāḥ)  
 A/B: 十の功德 (daśa guṇāḥ) / 十の利益 (daśa anuśamsāḥ)  
 C: 十の利益 (daśa anuśamsāḥ).

<sup>25</sup> 中央アジア写本『シュカ・ストラ』でも同様である。

<sup>26</sup> 但し § 79 は最後は loc. 形である。

<sup>27</sup> § 62 に関しては両写本とも結句がない。

<sup>28</sup> 但し § 79 は最後は loc. 形である。B写本ではここに挙げた節以外には結句は存在しない。

<sup>29</sup> 但し § (7) は「十」ではなく「多くの(bahula)」である。また § (9) は途中までしかない。

- Ch-5, 6: 功德  
 Tib-1, 3: phan yon (= Skt. anuśamsā)  
 Tib-2: legs pa (= Skt. anuśamsā)

一見して分かるように、SC 断片のみが大きく異なっていて、「ダルマ」(dharma)という語を用いている。確かにこの語の表す意味は広く、「福・功德」の意味で用いられることは不思議ではない。しかし、SC 断片のみが dharma という語を一貫して使っていることに何か特別な意味でもあるのだろうか。

guṇa という語が dharma という語に言い換えられる例がある。それもこの KV に関係した伝承の中である。ボロブドゥール遺跡の旧基壇部分には KV からそのモチーフを取ったレリーフが残っているが、その第 138 番パネルの右側には器をもった 6 人が一段高い所に座る 3 人に対面している構図が刻まれており、レリーフ上部に残る碑文は dāna と読めるのだと言われている。その左側には人々が合掌しながら一段高い所に座る僧侶と思しき 4 人の、おそらくは説法を聴いている図柄が刻まれていて、その上辺には kuśaladharmabhājana と碑文が残っているのだとされている<sup>30</sup>。この部分をシルヴァン・レヴィは KV § 68 「鉢の施与」をモチーフにしたものと解釈し、次のように言う：

「さてカルマ・ヴィバング第 6 8 節は鉢の施与について語る、即ち katame daśānuśamsā bhājanapradānasya (鉢を施与することの 10 の功德は何であるか)。これは間違いなく右側のレリーフのモチーフである(中略)。左側のレリーフについては、KV には碑文の意味に対応するような同じ文句が見あたらない。KV はこう続く：*bhājanabhūto bhavati guṇānām snigdhasamtatir bhavati* (諸々の福德の器となる、友情は継続する)。ここで使われている guṇa という語がレリーフ碑文の kuśaladharma と同義で用いられていることに反対する人はいないであろうが、さらにもう少し見てみよう。Chg と呼ぶ漢訳では [= Ch-5, 工藤注記] 「善法 *shen fa*」とあり、これは通常はサンスクリット語の kuśaladharma の訳語である。クチャ語の韻文には *lwāke tatākau ... cmela ne kreṃt pelaiknen tse* (彼は善き *krent* = kuśala 法 *pelaikne* = dharma の器 *lwāke* = bhājana となる)とある。こうしたことから元本の伝承の一つには guṇa ではなく kuśaladharma という読みがあった、それはボロブドゥールのレリーフから見いだされたものと同じである、ということをかかなりの確度で推測できるだろう」(1931: 7)<sup>31</sup>

ボロブドゥールのレリーフでは kuśaladharma = guṇa とあることが直接 SC 断片で dharma とあることにつながるとは言えないが、他の写本では guṇa を用いているか或いはそれを別の語に言い換えることを伝承の一つとして見なしうるとすれば、SC

<sup>30</sup> Lévi 1931 より。Cf. Krom 1927: 51–54.

<sup>31</sup> “Now the text of the *Karmavibhaṅga*, § LXVIII, here brings in the gift of receptacles: *katame daśānuśamsā bhājanapradānasya*, ‘Which are the ten benefits resulting from the gift of a receptacle?’ This is undoubtedly the subject of the right hand half-panel, .... As regards the other half of the bas-relief, the Sanskrit text of the *Karmavibhaṅga* does not contain exactly the same term as the inscription. The passage commences as follows: *bhājanabhūto bhavati guṇānām snigdhasamtatir bhavati*: ‘One becometh a receptacle of virtue; the moments of thought have a smooth flow.’ No one will dispute that the word guṇa can be used synonymously with *kuśala-dharma*, but we may go a step farther. One of the Chinese texts, which we have indicated as Chg, clearly contains the word 善法 *shen fa*, which is the regular rendering of the Sanskrit kuśala-dharma. The Kucean poem reads: *lwāke tatākau ... cmele ne kreṃt pelaiknen tse*, meaning: ‘He hath become the receptacle (*lwāke* = *bhājana*) of the good (*krent* = *kuśala*) laws (*pelaikne* = *dharma*).’ From this it may be inferred with certainty that one of the recensions of the original had the reading *kuśala-dharma* instead of *guṇa* in agreement with what we find on the *Barabudur*.” As to the Kucean, i.e., Tocharian passage, see Tamai 2015: 367. His gives a new transliteration: *lwāke tatāk[au MA](skeTAr s)u cm(e)lane kreṃt pelaiknentse* “He was a pot of good law at birth, : and his thought(s) are(←is) clear(←smooth).”

断片が保持するテキストも別の伝承である可能性もあるかもしれない<sup>32</sup>。

参考までに、中央アジア写本の『シュカ・スートラ』は Skt. KV の §§ 7-14 に対応するテキストで「鸚鵡経類」第一類に属する資料であるが、節始まりの定型句には *dharmā* という語が用いられている：

冒頭： §§ 8-14: *daśa dharmā XX-saṃvartanīyāḥ katame daśa* | (XXに生まれさせる十のダルマがある)

結句： §§ 7-14: *ime daśa dharmā XXsaṃvartanīyāḥ* ||

A: *katamat karma XX-saṃvartanīyaṃ | ucyate* | (X Xに生まれさせる業とはなにか)

B: *tatra katamaṃ karma XX-saṃvartanīyaṃ | ucyate* |

Pāli: *So tena kammaṇa* [evaṃ samattena evaṃ samādiṇṇena]

Ch-2: 摩納。何因何縁

Ch-3: 此摩牢。復何因復何縁。

Ch-4: 復次淨意。... 由此因縁。

Ch-5: 復有十業。

Ch-6: 復云何業獲XX。有十種業。云何十種。

Tib-1: *de la XX bar 'gyur ba'i las yod de.*

Tib-2: *ji ltar las kyis XX bar 'gyur zhe na*

Tib-3: *de la XX bar 'gyur ba'i las gang zhe na.*

§§ 1-14 では或る結果（例えば、短命・長命、裕福・貧乏）をもたらす業が何であるのかを列挙していく。これこれの業 (*karma*) を原因としてその結果が生ずるという表現が共通しているのだが、中央アジア写本『シュカ・スートラ』は他のヴァージョンでは *karma* という語で示している所を *dharmā* という語を用いていて、尚且つ内容を「十の」という形で説いており、このような記述は他にはない（十に整えるのは Ch-5, 6 がある）。但し、SC 断片のテキストを除けば、である。こうした記述の類似性は SC 断片が阿含系の『シュカ・スートラ』から展開した可能性を示唆するものと思われる。

### 2.2.3. (3) 果報の定型句

業報を数え上げる最後の3つは次のようになる（但し、節によっては8番目のものが必ずしも「富裕になる」というものになっていないが、多くの節で共通する項目としてここに示す）。

SC: *mahābhogo bhavati <|> svarge upapadyate <|> kṣipraṃ parinivāyati <|>*

A: *mahābhogo bhavati | svargeṣūpapadyate | kṣipraṃ ca parinirvāti |*

B: *mahābhogo bhavati | svarge copapadyate | kṣipraṇ ca parinirvāti* |<sup>33</sup>

C: *mahābhogo bhavati | svargeṣūpapadyate | kṣipraṃ ca parinirvāti* | 2-5, 8<sup>34</sup>  
*svargeṣūpapadyate | kṣipraṃ ca parinirvāti | 1, 6*

<sup>32</sup> 尚、レヴィが指摘するように「クチャ語」、即ちトカラ語テキストは Ch-5 に対応するが、この SC 断片との関係は不明である。Tamai 2015: 369 にも両者が同一であるとする (“Now I see that the Toch. and Ch. 佛爲首迦長者説業報差別經 are identical in detail, ...”).

<sup>33</sup> § 67 のA写本には “mahābhogo bhavati” が無く、項目数も 1 1 である；他方、その文はB写本には含まれていて、そのため項目数は 1 2 となる。両写本とも、§ 65 では “svarga-; mahābhoga; kṣipraṃ” の順になっている。

<sup>34</sup> § (7) は十項目ではないために三つとも存在しない。この写本では他と全く異なる記述が残されている。§ (9) は途中までしか存在しないので、項目も 4 つ目の項目で途切れている。

Ch-5: 八者具大福報。九者命終生天。十者速證涅槃。<sup>35</sup>

Ch-6: 八崇貴（尊貴）自在。九生天自在。十速證圓寂。<sup>36</sup>

Tib-1~3: longs spyod che bar 'gyur ba dang | mtho ris su skye bar 'gyur ba dang | myur du yongs su mya ngan las 'da' ba ste |<sup>37</sup>

これら三項目は第二類テキストの特徴であり、SC 断片がそれらを有していることは KV の別ヴァージョンであることを結論する為の有力な証拠となる。

尚、節の順序が他のヴァージョンと全く異なっていることから、SC 断片が一つのまとまったテキストを伝える写本の一部ではなく、何か別のテキストから適宜必要な所を抜粋した、ある種の備忘録の一部である可能性も完全に否定されたわけではない。しかし、その場合でも抜粋の元となった別のテキストが KV の諸ヴァージョンと全く異なった順序を持つテキストであると仮定しなければならない。抜粋に際して、元のテキストからわざわざ節を前後しながら写したというのは手間のかかることであり、むしろ順に抜粋するのが普通であろう。他のヴァージョンとは順序が連続せず、前後関係も対応しない以上、仮に抜粋であったとしてもそこに見られる順序でのテキストが存在したと考える方が合理的である。ここで扱った SC 断片のもう片面（もしあるとすればだが）、或いは他のフォリオが発見されるならば、備忘録であったかどうかの判断をつけるのは意外と簡単に出来るだろう。現在まで我々が手にしうる諸々の仏教文献の中で、布施・供養によってもたらされる果報を記述していくテキストで、しかもその果報が十ずつにまとめられ、更に後半三つの果報が共通して「裕福になる・天界に生まれる・速やかに涅槃する」というものであるようなテキストは今のところ KV しか存在しない。各節の冒頭・末尾にある定型句が使う単語の違いは見られるものの、その形式はかなり共通している。したがって、やはりこれら断片も KV の或る段階のテキストである可能性が極めて高い。現時点では、KV の別ヴァージョンではない可能性が僅かでも残っていることを指摘するに留める。

### 3. まとめ

幾つかの断片を接合し、たった一枚のフォリオ、しかも本来あったであろうはずの内容の三分の二だけしか回収出来ない写本ではあるが、実に多くのことを導き出してくれる。これまでに検討してきたことに基づき、導きだせることを述べていこう。

- ① 節の冒頭・末尾の定型句が他のヴァージョンと同じ構文形式をとっていること。
- ② 施与によってもたらされる功德が十に纏められていること。
- ③ その十の功德のうち、最後の三つが他のヴァージョンと共通していること。

<sup>35</sup> 3つの功德を全て含む節は次の通り（節番号は Ch-5 のそれを用い、括弧内には Skt. KV の節番号を付す）：65(63), 66(64), 68(65), 69(66), 70(68), 71(69), 73(74), 74(75)。Ch-5 § 75 (62) には3つが含まれていない。

<sup>36</sup> この Ch-6 では、“mahābhogo bhavati”に相当する功德が必ずしも十種の内の8番目に挙げられておらず、その順番はばらばらである（節の番号は Ch-6 のものである。[ ] 内に Skt. KV の節番号を付す）：六尊貴自在。(76[63]); 七尊貴自在。(77[x]); 九富貴上族自在生天。(80[x]), 七尊貴自在。(79[65]); 七豊足珍寶。(91[69]); 七尊貴自在。(84[75], 85[76]); 八崇貴自在。(86[x])。

<sup>37</sup> Tib-1~3 は多少の違いはあってもほぼ一致している。したがって、ここには Tib-3 の表現を挙げた。



これらから、これらの断片が伝えるテキストが Karmavibhaṅga であることは確実であろう。更に、以下のことから伝承の違いを指摘できる。

- ④ 節の順序が他のヴァージョンと全く一致しないこと。
- ⑤ 列挙される功德の内容が、最後の三つを除けば、他のヴァージョン同士がそうであるように、必ずしも全てが一致するわけではないこと。
- ⑥ 業報を説明する引用が一切含まれないこと。

増広された「鸚鵡経類」第二類に属するテキストではあるが、A・B写本に伝わるサンスクリット本 KV とは異なる伝承にあるテキストであることは確からしく、また引用を含まない点においてC写本に近いグループのものである。写本の筆写年代は正確にはつかめないが、文字(Gilgit/Bamiyan Type I)が6世紀以降のものであることから、「鸚鵡経類」第二類の展開するなかで相当早い段階に作られたテキストであり、成立過程上ではC写本より前の段階にあることが言える。少なくとも引用文献を持たない点からすると、系統的にはC写本と同じ流れ・グループに属するものと考えてよいだろう。先に述べたように、C写本に代表される引用を含まないテキストの系統は有部系の伝承を反映していることが指摘されている。そうすると、SC断片もまた有部系であるかもしれないし、或いは業報を説く文献として共通に保持されていたテキスト（未だ部派的な改変を受けていないもの）であるかもしれない。列挙される功德の内容や節の順序の違いは、伝承された時期・地域の違いを反映したものと思われる。それは別の見方をすれば、内容が相互に異なるが同一名で伝えられたテキストが複数存在したことの証左ともなる。

そうすると、ネパール写本に見られるようなサンスクリット本の二つの伝承以外に、節の順序、その業報の内容が異なる、新しい別の伝承テキストが見出されたことになる。勿論、ネパール写本の二つの伝承と言っても、引用文の有無が区別の最大の規準であったから、その意味では引用を持たない方の伝承の一つと考えることもできる。

発見された地域から推測すれば、SC断片に残るテキストは北西インドに流布していたヴァージョンで、地域的には中央アジア写本の『シュカ・スートラ』の系譜に連なるものではないだろうか。使われる文脈は異なり、またその意味も異なるが、多様な意味を持つ dharma という語を用いている点、そして決定的なのは中央アジア写本の『シュカ・スートラ』が有する、第一類に属する「中阿含経」の異訳である漢訳仏典(Ch-1~3)にはない特徴、即ち列挙する業あるいは功德を十に揃える点は、第一類から第二類へと展開するこの文献の中で両者が極めて近い関係にあることを示しているのではないかと思われる。

それ故、列挙される内容が十に整序されているかどうかで「鸚鵡経類」の第一類を分け、そして第二類は引用の有無によって分けてテキストの展開を示すならば、次のように分けることができよう。

第一類（項目未整序）	Pāli, 漢訳 (Ch-1, 2, 3, 4)
第一類（項目整序）	中央アジア『シュカ・スートラ』写本
第二類（項目整序・引用無）	SC断片(北西インド), C写本(ネパール), 漢訳 (Ch-5, 6), Tib-2, Tib-3
第二類（項目整序・引用有）	A・B写本(ネパール), Tib-1

したがって、SC断片は、第一類から第二類へと飛躍的に業報項目が増加した後で第二類に属するテキストではあるが、まだ引用が挿入されず（その意味ではC写本と同系になるが、節の順序やその内容は異なる）、他方阿含系のテキストとも共通点を持つ、いわばテキストが増広・発展する過程のちょうど間に位置するものである可能性が極めて高い、重要な資料なのである。

## KV 資料：

### パーリテキスト：

*Majjhima-Nikāya* No. 135, *Cūḷakammavibhaṅga* (PTS ed. MN. III, 202–206).

### サンスクリット写本：

中央アジア梵語断簡: Hoernle no. 149.x/1-2; Turfan, SHT Kat.-Nr. 1210 (X 1718)

A 写本, no. 4-20, 貝葉, 76葉 (ネパール国立公文書館蔵)

B 写本, no. 1-1697, 貝葉, 27 + 3 葉 [= No. 5-141] (ネパール国立公文書館蔵)

C 写本, B 写本に付随, 貝葉, 2葉 (ネパール国立公文書館蔵)

D 写本, A 写本に付随, 貝葉, 1葉 (ネパール国立公文書館蔵)

E 写本, no. 4-951, B 写本の写し, 紙, 10枚 (ネパール国立公文書館蔵)

SC断片: 以下に写真が公開されている:

49. [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.049-50a.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.049-50a.png); [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.049-50b.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.049-50b.png)

176. [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.175-180a.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.175-180a.png); [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.175-180b.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.175-180b.png)

252. [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.250-253a.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.250-253a.png); [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.250-253b.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.250-253b.png)

255. [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.255-256a.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.255-256a.png); [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.255-256b.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.255-256b.png)

258a. [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.257-260a.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.257-260a.png); [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.257-260b.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.257-260b.png)

uf19/1b. [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.uf019a.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.uf019a.png); [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.uf019b.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.uf019b.png)

uf1/1b. [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.uf.001a.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.uf.001a.png); [https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img\\_to\\_txt/2382.uf.001b.png](https://www2.hf.uio.no/polyglotta/public/media/img_to_txt/2382.uf.001b.png)

### 漢訳：

Ch-1: 『佛說兜調經』 (T no. 78, vol. 1, 887b5–888b11). 失訳, 265–316 C.E.

Ch-2: 『中阿含經』 第百七十經 「鸚鵡經」 (T no. 26(170), vol. 1, 703c21–706b11). 瞿曇僧伽提婆, 397–398 C.E.

Ch-3: 『佛說鸚鵡經』 (T no. 79, vol. 1, 888b16–891a13). 求那跋陀羅, 435–443 C.E.

Ch-4: 『佛說淨意優婆塞所問經』 (T no. 755, vol. 17, 588c9–590b7). 施護, 982–1017 C.E.

Ch-5: 『佛爲首迦長者說業報差別經』 (T no. 80, vol. 1, 891a18–895b21) [= Lévi: Chg]. 瞿曇法智, 582 C.E.

Ch-6: 『分別善惡報應經』 (T no. 81, vol. 1, 895b26–901b19) [= Lévi: Cht]. 天息災, 982–1000 C.E.

### チベット訳：

Tib-1: Cone no. 977, Derge no. 338, Narthang no. 323, Peking no. 1005, Lhasa no. 344, 'Jang Sa-tham no. 278, Urga no. 338, Newark Mdo bsde tsha // 20.472

Tib-2: Cone no. 978, Derge, no. 339, Narthang no. 324, Peking no. 1006, London no. 213, sTog no. 298, Tokyo (Kawaguchi) no. 295, Lhasa, no. 345, 'Jang Sa-tham no. 279, Urga no. 339

Tib-3: London no. 202, sTog no. 287, Phug brag no. 186, Phug brag no. 404, Narthang no. 784 (783?), Tokyo (Kawaguchi) no. 284, Lhasa no. 343

## Bibliography

Eimer, Helmut

1987 “Zur Reihenfolge der Texte in der Abteilung Vinaya des tibetischen kanjur,” in: *Zentralasiatische Studien* 20, 219–27.

Fukita Takamichi

1990 “Sanskrit Fragments of the *Karmavibhaṅga* Corresponding to the Canonical Tibetan and Chinese Translations,” in: *Annual of Buddhist Studies* [*The Bukkyo Bunka Kenkyusho Nenpō*] 7-8, 1–23.

Krom, N. J.

1927 *Barabudur, Archaeological Description*, 2 vols. The Hague [Rep. Kyoto: The Rinsen Shoten, 1993].

Kudo Noriyuki 工藤順之

2004 *The Karmavibhaṅga: Transliterations and Annotations of the Original Sanskrit Manuscripts from Nepal*. Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VII. Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology

2005 「サンスクリット本『カルマ・ヴィバング』テキスト形成の一考察」『印度學佛教學研究』53-2, 871–866(L) [(134)–(139)].

2006a “The First Three Folios of Manuscript B of the *Karmavibhaṅga*,” in: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2005*, vol. IX, 2006, pp. 33–42 [with Diwakar Acharya].

2006b “One More Manuscript of the *Karmavibhaṅga* in the National Archives of Nepal, Kathmandu: Transliteration of Manuscript E (1),” in: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2005*, vol. IX, 43–60.

2007 “One More Manuscript of the *Karmavibhaṅga* in the National Archives of Nepal, Kathmandu: Transliteration of Manuscript E (2),” in: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2006*, vol. X, 93–116.

Lévi, Sylvain

1931 “The *Karmavibhaṅga* Illustrated in the Sculptures of the Buried Basement of the Barabudur,” in: *Annual Bibliography of Indian Archaeology for the year 1929*, Leyden: E. J. Brill, 1–7.

1932 *Mahākarmavibhaṅga (La Grande Classification des Actes) et Karmavibhaṅgopadeśa (Discussion sur le Mahā Karmavibhaṅga), textes sanscrits rapportés du Nepal, édités et traduits avec les textes parallèles en sanscrit, en pali en tibétan, en chinois et en kutchéen*, Paris.

並川孝儀 (Namikawa Takayoshi)

1984 「鸚鵡經の展開—特に *Mahākarmavibhaṅga* を中心として」『佛教研究』14, 27–43.

1985 「*Mahākarmavibhaṅga* の所属部派について」『印度學佛教學研究』33-2, 773–769.

岡野潔 (Okano Kiyoshi)

2002 「正量部の伝承研究(1): 胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化に見る人間の歴史」『櫻部建博士喜寿記念論集・初期仏教からアビダルマへ』京都: 平樂寺書店, 217–231.

Simon, Walter

1970 “A Note on the Tibetan Version of the *Karmavibhaṅga* Preserved in the MS Kanjur of the British Museum,” in: *BSOAS* 33-1, 161–166.

Tamai Tatsushi

2015 “The Tocharian *Karmavibhaṅga*,” in: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2014*, vol. XVIII, 337–381.

## 活動報告（平成29年3月以降）

「研究所運営委員会」を年に2、3回の割合で開会。

「国際仏教学高等研究所所員会」を月1回の割合（夏期休暇中を除く）で開会。  
以下、主立った活動について記す

## 平成28年度

3月9日(木) 第77回 仏教学懇話会

講師：宮治昭博士(名古屋大学名誉教授・龍谷大学特任教授)

テーマ：「弥勒信仰とその美術—インド・ガンダーラから中国へ—」

3月22日(水) タイ、DCI Center for Buddhist Studies, 副所長 Taniyo Bhikkhu, Dr. Maythee Pitakteeradhanm (研究主任), Wilaiphon Jaimun 氏, Achawan Ngumruksa 氏来所。所員と研究について懇談

## 平成29年度(2017年)

4月15日(土)~5月2日(火) 辛嶋静志教授 中国・四川大学、上海師範大学招聘出張

4月16日(日)~20日(木), 24日(月)~26日(水)：四川大学・中国俗文化研究所で次の八つの連続講義（各二時間）を行った。(1) 觀世音與觀自在（觀世音と觀自在）；(2) 犍陀羅語與大乘佛教（ガンダーラ語と大乘仏教）；(3) 盂蘭盆之義—自恣日の“飯鉢”（盂蘭盆の意味—自恣の日のご飯鉢）；(4) 《列子》與《般若經》（『列子』と『般若經』）；(5) 支謙譯研究—《大明度經》與《道行般若經》對比研究（支謙訳研究—『大明度經』と『道行般若經』の比較研究）；(6) 利用“翻版”研究中古漢語演變—以《九色鹿經》為例（“翻版”を利用した中古漢語の変遷の研究—『九色鹿經』を例として）；(7) 支謙譯《大阿彌陀經》、支謙譯《平等覺經》以及《無量壽經》對比研究（支婁迦讖訳『大阿彌陀經』・支謙訳『平等覺經』および『無量壽經』の比較研究）；(8) 支謙譯《道行般若經》《大阿彌陀經》以及支謙譯《維摩經》的原語面貌—音寫詞分析（支婁迦讖訳『道行般若經』・『大阿彌陀經』および支謙訳『維摩經』の原語の様相—音写語分析）。

4月21日(金)~22日(土)：重慶市、四川外国語大学を訪問。4月21日、「漢譯佛典語言研究的意義及方法」（漢訳仏典の言語学的研究の意義と方法）と題して公開講演。

4月28日(金)：上海市、上海師範大学中国文学系にて「漢譯佛典語言研究的意義及方法」（漢訳仏典の言語学的研究の意義と方法）と題して講演。

4月29日(土)~5月1日(日)：上海師範大学で開催された学術シンポジウム「六朝佛經梵漢對勘語料庫與中古漢語研究」に参加、開幕式式辞を述べるとともに「試探西晉竺法護譯《正法華經》的原語面貌」（西晋代竺法護訳『正法華經』の原語の様相）と題して主題発表。

5月 研究所出版物発送

・『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』平成28年度(第20号) [3月31日付発刊]

・ Adelheid METTE, Noriyuki KUDO, Ruriko SAKUMA, Chanwit TUDKEAO, and Jiro HIRABAYASHI (ed.), *Gilgit Manuscripts in the National Archives of India. Facsimile Edition. Vol. II.4. Further Mahāyānasūtras: Ratneketuparivarta, Kāraṇḍavyūha, Ajitasenavyākaraṇa and Avikalpapraveśasūtra*, 2017, New Delhi/Tokyo: The National Archives of India/The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University, xlv pages + 151 plates, ISBN 978-4-904234-15-0.

・ Noriyuki KUDO (ed.), *Gilgit Manuscripts in the National Archives of India. Facsimile Edition. Vol. III. Avadānas and Miscellaneous Texts*, 2017, New Delhi/Tokyo: The National Archives of India/The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University, lxvi pages + 146 plates, ISBN 978-4-904234-14-3.

5月28日(日)~7月2日(日) 浙江大学教授・方一新博士、同・王雲路博士 客員研究員として滞在。仏典の漢語についての共同研究を行う。

6月1日(木) 辛嶋教授 京都出張

龍谷大学で開催された科研（基盤（B））「中央アジア仏教美術の研究—釈迦・弥勒・阿彌陀信仰の美術の生成を中心に—」（代表：宮治昭）2017年度第1回全体研究会参加。

6月29日(木) 第78回 仏教学懇話会

講師：方一新博士(浙江大学教授)

テーマ：「『太子須大拏經』から古写経と刊本との対校を考察する」

(從《太子須大拏經》看寫經、刻經之對勘)  
 講師：王雲路博士(浙江大学教授)  
 テーマ：「二つの中古漢訳仏典から古写経と刊本との対校の価値を考察する」  
 (從兩種中古佛經管窺寫經、刻經比勘之價值)

8月8日(火) 辛嶋教授 ミホ・ミュージアム(滋賀県)所蔵梵語写本の調査。

10月10日(火) 李晶氏(中国・人民大学文学院漢語言語文字学専攻) 研究の為、来日(一年間、指導：辛嶋教授)

9月2日(土)～3日(日) 辛嶋教授、工藤教授 第68回日本印度学仏教学会学術大会(於：花園大学)に参加。  
 2日 辛嶋教授「大衆部と大乘經典」と題して発表

9月10日(日)～10月18日(木) 辛嶋教授 中国招聘出張

9月11日(月), 13日(水), 15日(金), 18日(月), 20日(水), 22日(金)に、復旦大学哲学学院で、「仏教学講座シリーズ」して六つの講義(各一時間半)を行った(<http://philosophy.fudan.edu.cn/d3/01/c6942a119553/page.htm>)。 (1) “On *Avalokitasvara* and *Avalokiteśvara*”, (觀世音と觀自在) ; (2) 犍陀羅語與大乘佛教(ガンダーラ語と大乘仏教) ; (3) 《般若經》是在犍陀羅以犍陀羅語產生的嗎？(『般若經』は、ガンダーラ地方でガンダーラ語で作られたか) ; (4) 「“變”、“變相”及“變文”之義」(「變」、「變相」、「變文」の意味) ; (5) 《長阿含經》及《中阿含經》的原語面貌——音寫詞分析(『長阿含經』と『中阿含經』の原語の様相——音写語分析) ; (6) 《列子》與《般若經》(『列子』と『般若經』)

9月26日(火)～28日(水)：金華市、浙江師範大学を訪問。9月27日、同人文学院にて「漢譯佛典語言研究的意義及方法」(漢訳仏典の言語学的研究の意義と方法)と題して講演。  
 (<http://yjsb.zjnu.edu.cn/2017/0929/c4710a207865/page.htm>)

9月28日(水)～29日(木)：浙江大学漢語史研究中心を訪問。9月28日、「漢譯佛典語言研究的意義及方法」(漢訳仏典の言語学的研究の意義と方法)と題して講演。  
 ([http://hanyushi.zju.edu.cn/redir.php?catalog\\_id=20&object\\_id=11265](http://hanyushi.zju.edu.cn/redir.php?catalog_id=20&object_id=11265))

10月2日(月)～15日(日)：山西省五台山の仏教与東亜文化五台山国際研究院で、中国全国から選抜された仏教学関係の院生・若手研究者に、《法華經》に関して二週間集中講義。

10月16日(月)：午前、四川大学・中国俗文化研究所で「漢譯佛典語言研究的意義及方法」(漢訳仏典の言語学的研究の意義と方法)と題して公開講演。午後、同・中国チベット学研究所にて、「誰創造了大乘經典——大衆部與方等經典」(大乘經典は誰が作ったか：大衆部と方等經)と題して講演。  
 (<http://www.zangx.com/cms/news/guonei/2017-10-25/852.html>)

10月17日(火)～18日(水)：四川大学・中国俗文化研究所で開催された第十届「中古漢語学術研討会」に参加し、「試論梵語“*chattra*”、漢語“利”、朝鮮語“*tjer* 달(질)”以及日語“*tera* てら”」(梵語*chattra*、漢語“利”、朝鮮語“*tjer* 달(질)”および日語“*tera* てら”についての試論)と題して主題発表。

10月4日(水)～11月8日(水) フライブルク大学名誉教授・オスカー・フォン・ヒニューバー博士 招聘研究員として滞在。ギルギット写本等の共同研究を行う。フライブルク大学孔子学院元院長・ハイイエン・フ・フォン・ヒニューバー博士も同じく滞在。

10月21日(土) 第79回 仏教学懇話会

講師：ニコラス・シムス＝ウィリアムズ博士(ロンドン大学名誉教授、英国学士院会員)  
 テーマ：「文献学から歴史へ：古代アフガニスタンの言語の解説」

(From philology to history: Deciphering the language of ancient Afghanistan)

講師：ウルスラ・シムス＝ウィリアムズ博士(大英図書館キュレーター)

テーマ：「南シルクロード(西域南道)からの写本収集品と収集者たち」

(Manuscript collections and collectors from the Southern Silk Road)

講師：イエンス・ブローラヴィック博士(オスロ大学教授、ノルウェー学士院会員)

テーマ：「スコイエン・コレクション中の『アマラコーシャ』に関連する類義語辞典の八世紀の写本断簡について」

(An 8<sup>th</sup> century fragment in the Schøyen collection of a synonym lexicon related to the *Amarakośa*)

10月28日(土) 第80回 仏教学懇話会

講師：オスカー・フォン・ヒニューバー博士(フライブルク大学名誉教授)

テーマ：「ヴェーダ、インドの文法家、そして初期仏教の言語」  
(The Veda, Indian Grammarians, and the Language of Early Buddhism)

11月2日(木)~6日(月) 辛嶋教授 台湾招聘出張

11月3日(金)~5日(日)：中央大学及び仏光大学で開催された第十一届「漢文仏典語言学国際学術研討会」に参加し、「試探西晉竺法護譯《正法華經》的原語面貌」（西晋代竺法護訳『正法華經』の原語の様相）と題して主題発表。

11月21日(火)~27日(月) 辛嶋教授 ウズベキスタン出張

11月24日、日本と同国の外交関係樹立25周年を記念してテルメズ国立大学で行われた、仏教文化に関する国際学術会議に出席、Буддизм Махаяны из Гандхары через Бактрии в Китай (ガンダーラからバクトリアを経て中国へ伝わった大乘仏教) と題して基調講演、さらに分科会にて、Передача буддийской культуры из Гандхары через Бактрии в Восточную Азию (ガンダーラからバクトリアを経て東アジアへの仏教文化の伝承) と題して発表。

11月25日、テルメズ国立大学、ウズベキスタン歴史・考古学学部の名誉教授称号を受ける。

11月30日(木)~12月1日(金) 中国・北京蔵学研究中心、科学研究業務弁公室総幹事長・鄭堆博士、李学竹博士（宗教研究所研究員）、冯智博士（中国蔵学研究中心歴史研究所研究員）、万德卡尔博士（中国蔵学研究中心経済研究所副研究員）、孟秋丽博士（中国蔵学研究中心歴史研究所副研究員）、高颖博士（中国蔵学研究中心宗教研究所補助研究員）、共同研究の討議の為来所。

12月5日(火)~27日(水) ペシャワール大学名誉教授・ナシム・ハン博士 招聘研究員として滞在。ガンダーラ語大乘仏典写本等の共同研究を行う。

12月5日(火)~6日(水) 辛嶋教授 京都出張

12月5日(火) 浄土真宗本願寺派宗学院の公開講座にて「言葉の向こうに開ける仏教の原風景——「阿弥陀」、「即得往生」、「一闍提」の本当の意味——」と題して講演。

12月16日(土) 第81回 仏教学懇話会

講師：ナシム・ハン博士 (ペシャワール大学名誉教授)

テーマ：「仏教彫刻を（考古学的）コンテクストから考察する：ガンダーラのブトカラ第3遺跡の例」

(Studying Buddhist Sculptures in Context: The case of But Kara III site in Gandhāra)

12月17日(日) 辛嶋教授 京都出張

龍谷大学で開催された科研（基盤（B））「中央アジア仏教美術の研究—釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に—」（代表：宮治昭）2017年度第3回全体研究会参加。

(平成30年, 2018年)

1月4日(木)~2月2日(金) ロシア、サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所、サファラリ・シャマフマドフ博士 招聘研究員として滞在。中央アジア出土梵語仏典断簡等についての共同研究を行う。

1月20日(土) 第82回 仏教学懇話会

講師：サファラリ・シャマフマドフ博士 (ロシア科学アカデミー東洋写本研究所)

テーマ：「ロシア科学アカデミー東洋写本学研究所所蔵仏教写本断簡研究——特に陀羅尼断簡に注目して」

(Research on Buddhist Sanskrit fragments of the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences, with special attention to the fragments of *dhāraṇīs*)

**国際仏教学高等研究所・所員の著作**  
**(List of Publications of the IRIAB Fellows)**

辛嶋静志 (Seishi KARASHIMA)

- “New Research on the Buddhist Sanskrit Manuscripts from Central Asia”, in: *Sanskrit on The Silk Route*, ed. by Shashibala, New Delhi 2016: Bharatiya Vidya Bhavan, pp. 78~88.
- “Vehicle (*Yāna*) and Wisdom (*Jñāna*) in the Lotus Sutra—the Origin of the Notion of *Yāna* in Mahāyāna Buddhism”, *id.*, pp. 155~198.
- “On *Avalokitasvara* and *Avalokiteśvara*”, in: *ARIRIAB (Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University)*, vol. 20 (2017): 139~165.
- “On *cha* 刹, *tjer* 델(절) and *tera* てら”, in: *ARIRIAB (Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University)*, vol. 20 (2017): 241~249.
- 「「変」、「変相」、「変文」の意味」, 『印度學佛教學研究』 65.2 (2017.3): 208(732)~215(739) [“Meanings of *bian* 變, *bianxiang* 變相 and *bianwen* 變文”, in: *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)*, 65.2 (2017.3): 208(732)~215(739)]
- 「《中阿含经》原语问题之考察」, 《南京师范大学学报》(社会科学版), 2017.2: 148~152 (裘雲青訳). [“Underlying Language of the Chinese Translation of the Madhyama-Āgama”, in: *Journal of Nanjing Normal University*, Social Science Edition, 2017, 2, pp. 148~152 (translated by Qiu Yunqing)].
- “Some Folios of the *Tathāgataguṇajñānācintya viśayāvatāra* and *Dvādaśadaṇḍakanāmāṣṭaśatavimālīkaraṇā* in the Kurita Collection”, in: *International Journal of Buddhist Thought and Culture*, vol. 27, no. 1 (2017.6): 11~44.
- 「試論梵語“*chattra*”、漢語“刹”、朝鮮語“*tjer* 델(절)”以及日語“*tera* てら”」, 《佛学研究》2017第1期, 総第26期 (中国佛教文化研究所, 北京, 2017.7): 106~114 [“On Sanskrit *chattra*, Chinese *cha* 刹, Korean *tjer* 델(절) and Japanese *tera* てら”, in: *Buddhist Studies (The Research Institute of Buddhist Culture of China, Beijing, China)*, vol. 26 (2017.7): 106~114].
- 「*brāhmaṇa*、*śramaṇa* 和 *Vaiśramaṇa* — 印度语言流俗词源及其在汉译的反映」 《人文宗教研究》第九辑 (2017.10), 宗教文化出版社, pp. 1~42 (裘雲青訳)[“*Brāhmaṇa*, *śramaṇa* and *Vaiśramaṇa* — Indian Folk Etymologies and their Reflections in Chinese Translations”, in: *Journal of Humanistic Religion (Religious Cultures Press, Beijing)*, vol. 9 (2017.10): 1~42 (translated by Qiu Yunqing)].
- 「大衆部と大乘」, 『印度學佛教學研究』 66.1 (2017.12): 411(82)~405(88) [“Mahāsāṃghikas and Mahāyāna”, in: *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)*, 66.1 (2017.12): 411(82)~405(88)].

工藤順之 (Noriyuki KUDO)

- Gilgit Manuscripts in the National Archives of India. Facsimile Edition. Volume III: Avadānas and Miscellaneous Texts*, Noriyuki Kudo (ed.), 2017, New Delhi/Tokyo: The National Archives of India/The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University, lxvi pages + 146 plates, ISBN 978-4-904234-14-3.
- Gilgit Manuscripts in the National Archives of India. Facsimile Edition. Volume II.4: Further Mahāyāna-sūtras*, Adelheid Mette, Noriyuki Kudo, Ruriko Sakuma, Chanwit Tudkeao and Jiro Hirabayashi (ed.), 2017, New Delhi/Tokyo: The National Archives of India/The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University, xliv pages + 151 plates, ISBN 978-4-904234-15-0.
- 「『スマーガダー・アヴァダーナ』ギルギット写本(2): 写本B, C」 『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』 第20号, 319~344 [“Gilgit Manuscripts of the *Sumāgadhā-avadāna* (2): Manuscripts B and C with a special Reference to the Fragments in the Srinagar Collection,” in: *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University*, vol. 20 (2017): 287~312].

**受贈受入書籍類 [Books & CD-ROMs/DVDs Received]**  
**(2017.2~2018.1)**

\* We should like to express our gratitude to those who have kindly sent us their publications. The following list of books, CD-ROMs and DVDs, exclusively in the fields of Indology and Buddhology, is certainly by no means complete.

- BAEK, Yongseong, *The Sun Over the Sea of Enlightenment: Gakhae illyun*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- BAK, Hanyeong, *An Anthology of East Asian Commentaries on the Nyayapravesa*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- CHOE, Chwiheo, *Essential Compendium for Buddhists: A Modern Buddhist Liturgy: Bulja pillam*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- CHOE, Namseon, *A Collection of Modern Korean Buddhist Discourses*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- DHAMMADINNA (ed.), *Research on the Madhyama-Āgama*, (Dharma Drum Institute of Liberal Arts. Research Series 5), 2017, Taipei: Dharma Drum Publishing Corporation.
- Gillet, Valérie (ed.), *Mapping the Chronology of Bhakti: Milestones, Stepping Stones, and Stumbling Stones: Proceedings of a Workshop Held in Honour of Paṇḍit R. Varadadesikan*, (Collection Indologie 124), 2014, Paris, Pondichéry: École Française d'Extrême-Orient, Institute Français de Pondichéry.
- GIM Yeongsu, *Sheaves of Korean Buddhist History: Joseon Bulgryosa-go*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- GIRARD, Frédéric, *Aimables Ermites de Notre Temps: Récits Composés par Sairo 西鷺軒, alias Kyōsen 橋泉, et Préfacés par Ihara Saikaku 井原西鶴*, (Monographies No. 196), 2017, Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- GO, Yuseop, *A Study of Korean Pagodas: Joseon tappa ui yeon'gu*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- GOODALL, Dominic, *Tantric Studies: Fruits of a Franco-German Collaboration on Early Tantra*, (Collection Indologie 131; Early Tantra Series 4), 2016, Pondicherry, Paris, Hamburg: Institut français de Pondichéry, École française d'Extrême-Orient, Asien-Afrika-Institut, Universität Hamburg.
- GOODALL, Dominic, *The Nīśvāsātattvasaṃhitā: The Earliest Surviving Śaiva Tantra. Vol.1* (Collection Indologie 128; Early Tantra Series 1), 2015, Pondicherry, Paris, Hamburg: Institut français de Pondichéry, École française d'Extrême-Orient, Asien-Afrika-Institut, Universität Hamburg.
- GRIMAL, François, *La Grammaire Paninéenne par ses Exemples = Paninian Grammar through its Examples. IV. 1*, (Collection Indologie 93.4.1; Rashtriya Sanskrit Vidyapeetha Series No. 302), 2006, Tirupati, Paris, Pondichéry: Rashtriya Sanskrit Vidyapeetha, École Française d'Extrême-Orient, Institute Français de Pondichéry.
- GRIMAL, François, *La Grammaire Paninéenne par ses Exemples = Paninian Grammar through its Examples. IV. 2*, (Collection Indologie 93.4.2; Rashtriya Sanskrit Vidyapeetha Series No. 303), 2006, Tirupati, Paris, Pondichéry: Rashtriya Sanskrit Vidyapeetha, École Française d'Extrême-Orient, Institute Français de Pondichéry.
- GWON, Sangro, Yi YEONGJAE and Han YUNGUN, *Tracts on the Modern Reformation of Korean Buddhism*. (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- GYEONGHEO, *The Gyeongheo Collection: Prose and Poetry by the Restorer of Korean Seon: Gyeongheo-jip*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- HAMAR, Imre and INOUE Takami, *Faith in Buddhism*, (Budapest Monographs in East Asian Studies 6), 2016, Budapest: Institute for East Asian Studies, Eötvös Loránd University.
- 胡海燕, *Collected Papers on the Chinese Buddhist Monk Faxian (approx. 342–423)* 『東晉法顯《仏国記》研究論文集』 (圓光佛學研究所叢書系列 4), 2017, 桃園市: 圓光佛學研究所.
- KIM, Jongwook, *Exploration of Korean Buddhist Thoughts*, (Humanities Korea Buddhism Series 4), 2016, Seoul: Dongguk University Press.
- KIM Jongwook, *East Asian Buddhism and Modern Buddhist Studies*, (Humanities Korea Buddhism Series 5), 2017, Seoul: Dongguk University Press.
- Kiss, Csaba, *The Brahmayāmalatantra, or, Picumata : a critical edition and annotated translation*, (Collection Indologie 130; Early Tantra Series 3), 2015, Paris, Pondichéry, Hamburg: École Française d'Extrême-Orient, Institute Français de Pondichéry, Asien-Afrika-Institut, Universität Hamburg.
- KOSA, Gabor, *China Across the Centuries: Papers from a Lecture Series in Budapest*, (Budapest monographs in East Asian Studies 7), 2017, Budapest: Budapest Department of East Asian Studies, Eötvös Loránd University.
- LASIC, Horst (ed.), *Sanskrit Manuscripts in China II: Proceedings of a Panel at the 2012 Beijing Seminar on Tibetan*



- Studies*, August 1 to 5, 2017, Beijing: China Tibetology Publishing House.
- LEE, Youngjin, *Critical Edition of the First Abhisamaya of the Commentary on the Prajñāpāramitā Sūtra in 25,000 Lines by Ārya-Vimuktiśeṇa, based on Two Sanskrit Manuscripts Preserved in Nepal and Tibet*, (Manuscripta Buddhica 3), 2017, Napoli: L'Orientale Università degli Studi.
- MAURER, Petra and Johannes SCHNEIDER (bearb.), *Wörterbuch der Tibetischen Schriftsprache / Im Auftrag der Kommission für Zentral- und Ostasiatische Studien der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. 31. Lieferung: da-dug*, 2016, München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- MAURER, Petra and Johannes SCHNEIDER (bearb.), *Wörterbuch der Tibetischen Schriftsprache / Im Auftrag der Kommission für Zentral- und Ostasiatische Studien der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. 32. Lieferung: dug khan-de nas*, 2016, München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- MAURER, Petra and Johannes SCHNEIDER (bearb.), *Wörterbuch der Tibetischen Schriftsprache / Im Auftrag der Kommission für Zentral- und Ostasiatische Studien der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. 33. Lieferung: de ni der bas na-dwan spro*, 2016, München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- MAURER, Petra and Johannes SCHNEIDER (bearb.), *Wörterbuch der Tibetischen Schriftsprache / Im Auftrag der Kommission für Zentral- und Ostasiatische Studien der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. 34. Lieferung: dwan blans-dharma*, 2016, München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- PRUITT William and Masahiro MIYAO, *To Digitize Myanmar Manuscripts, Manuscripts List and Digital Book Production*, (Philosophica Asiatica, Monograph Series, 4), 2017, Chuo Academic Research Institute.
- RAJKAI, Zsombor, *The Timurid Empire and Ming China: Theories and Approaches Concerning the Relations of the Two Empires*, (Budapest Monographs in East Asian Studies 5), 2015, Budapest: Budapest Department of East Asian Studies, Eötvös Loránd University.
- SCHMID, Charlotte, *La Bhakti d'une Reine: Śiva à Tiruccenampūṇṇi*, (Collection Indologie 123), 2014, Paris, Pondichéry: École Française d'Extrême-Orient, Institut Français de Pondichéry.
- STEINKELLNER, Ernst, *Early Indian Epistemology and Logic: Fragments from Jinendrabuddhi's Pramāṇasamuccayaṭīkā 1 and 2*, (Studia Philologica Buddhica. Monograph Series XXXV), 2017, Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- TOURNIER, Vincent, *La formation du Mahāvastu: et la Mise en Place des Conceptions Relatives à la Carrière du Bodhisattva*, (Monographies No. 195), 2017, École Française d'Extrême-Orient.
- WILLE, Klaus, *Sanskrihandschriften aus den Turfanfunden. Teil 12: Die Katalognummern 5800–7485*, (Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland. Bd.X.12), 2017, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag Stuttgart.
- YI, Neunghwa, *Harmonizing the Hundred Teachings: Baekgyo hoetong*, (Collected Works of Modern Korean Buddhism), 2018, Seoul: Jogye Order of Korean Buddhism.
- 金沢大学文化人類学研究室編『鳳珠郡能登町上町』（金沢大学フィールド文化学 13: 金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書 第32巻）, 2017, 金沢大学文化人類学研究室.
- 菅野博史『中国法華思想の研究』2017, 北京: 国際文化出版公司.
- 高山寺典籍文書総合調査団『平成二十八年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』2017, 高山寺典籍文書総合調査団.
- 金剛大学佛教文化研究所編『地論宗の研究』（金剛大学校外国語叢書）2017, 国書刊行会.
- 金剛大学佛教文化研究所編『敦煌寫本『大乘起信論疏』の研究』2017, 国書刊行会.
- 全国眞統会日蓮宗眞統会『眞師法縁史』2016, 全国尊統会.
- 武田科学振興財団・杏雨書屋編『磧砂版大藏經目録』第一冊, 2017, 大阪: 武田科学振興財団.
- 武田科学振興財団・杏雨書屋編『磧砂版大藏經目録』第二冊, 2018, 大阪: 武田科学振興財団.
- 段晴『青海藏医藥文化博物館藏佉盧文尺牘』2017, 上海: 中西書局.
- 東京文化財研究所『世界遺産用語集 改訂版』2017, 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所.
- 東北学院大学アジア地域文化研究所『日中韓周縁域の宗教文化』III, 2017, 東北学院大学アジア地域文化研究所.
- 二松學舎・菅原淳子編『二松學舎創立百四十周年記念論文集』I, II, 2017, 二松學舎.
- 藤井淳編『古典解釈の東アジア的展開: 宗教文献を中心として』2017, 京都大学人文科学研究所.
- 仏教美術研究上野記念財団助成研究会『図像蒐成 XIII: 仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書』2017, 京都, 仏教美術研究上野記念財団助成研究会.
- 法鼓山文化中心製作『法鼓山年鑑2015 (DVD)』2016, 台北: 法鼓山文教基金會.
- 法鼓山文化中心製作『法鼓山年鑑2016 (DVD)』2017, 台北: 法鼓山文教基金會.
- 森章司、金子芳夫著『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究 21』（「中央学術研究所紀要」モノグラフ篇 No.21: 個別研究篇 V）2017, 中央学術研究所.
- 龍谷大学世界仏教文化研究センター編『2016年度 研究活動報告書』2017, 龍谷大学世界仏教文化研究センター.

受贈受入雑誌 [Journals Received]  
(2017.2～2018.1)

- Acta Asiatica: Bulletin of the Institute Eastern Culture 112, 113  
 Acta Tibetica et Buddhica 8, 9  
 Annali Di Ca' Foscari 52  
 BDK Newsletter 道 6  
 Bulletin of the Nanzan Institute for Religion & Culture 41  
 China Tibetology 26-29  
 IDP News = Newsletter of the International Dunhuang Project  
 IDP: The Silk Road Online 49, 50  
 Japanese Religions 日本の諸宗教 41/1, 2  
 Mahāpiṭaka. Newsletter 23  
 MINPAKU Anthropology Newsletter 43, 44, 45  
 NCC宗教研究所ニュース 45, 46  
 Письменные Памятники Востока: Историко-Филологические  
 Исследования 18-30  
 The Eastern Buddhist. New Series 46/1  
 The Journal of Oriental Studies 27  
 Tobunken News 63, 64, 65  
 Written Monuments of the Orient 2015/2, 2016/1-2, 2017/1-2
- Zinbun 47  
 불교학리뷰 = Critical review for Buddhist studies 20, 21  
 愛知学院大学文学部紀要 46  
 インド哲学仏教学研究 25
- 叡山学院研究紀要 39  
 大崎学報 172, 173  
 大谷學報 96/1, 2, 97/1  
 大谷大学研究年報 69  
 大谷大学真宗総合研究所研究紀要 34  
 大谷大学真宗総合研究所研究所報 69, 70  
 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇 9  
 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇 9  
 杏雨 KYO-U 20  
 教化研究 160, 161  
 汲古 71, 72  
 キリスト教文化研究所紀要 35  
 現代密教 28  
 高野山大学図書館紀要 1  
 高野山大学密教文化研究所紀要 30  
 高野山大学密教文化研究所紀要別冊  
 『秘蔵寶鑑』の研究 第一分冊  
 高野山大学密教文化研究所紀要別冊  
 プロジェクト「宗教と科学の対話」  
 高野山大学論叢 52  
 国際哲学研究 6, 別冊 9  
 国際仏教学大学院大学研究紀要 21  
 国立民族学博物館研究報告 41/2, 3, 4, 42/1, 2  
 ころろ: 在家仏教ころろの研究所紀要 8/3
- Toho Gakkai  
 身延山大学国際日蓮学研究所  
 Universita Ca' Foscari Venezia  
 仏教伝道協会  
 Nanzan Institute for Religion and Culture  
 China National Center for Tibetan Studies  
 The British Library
- NCC宗教研究所  
 仏教伝道協会  
 国立民族学博物館  
 NCC宗教研究所  
 Russian Academy of Sciences, Institute of Oriental  
 Manuscripts  
 東方仏教徒協会  
 The Institute of Oriental Philosophy  
 国立文化財機構 東京文化財研究所  
 Russian Academy of Sciences, Institute of Oriental  
 Manuscripts  
 京都大学人文科学研究所  
 金剛大学校仏教文化研究所  
 愛知学院大学文学会  
 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部イン  
 ド哲学仏教学研究室  
 叡山学院  
 立正大学仏教学会事務局  
 大谷大学図書館  
 大谷大学図書館  
 大谷大学真宗総合研究所  
 大谷大学真宗総合研究所  
 金沢大学歴史言語文化学系  
 金沢大学歴史言語文化学系  
 武田科学振興財団  
 真宗大谷派教学研究  
 汲古書院  
 上智大学キリスト教文化研究所  
 智山伝法院  
 高野山大学図書館  
 高野山大学密教文化研究所  
 高野山大学密教文化研究所  
 高野山大学密教文化研究所  
 高野山大学密教文化研究所  
 高野山大学図書館  
 東洋大学国際哲学研究センター  
 国際仏教学大学院大学  
 国立民族学博物館  
 在家仏教ころろの研究所

- 駒澤大學佛教學部論集 48  
 三康文化研究所所報 52  
 三康文化研究所年報 48  
 四天王寺國際仏教大學紀要（四天王寺大學紀要） 63, 64  
 浄土宗学研究 42  
 浄土真宗総合研究 11  
 シルクロード研究 第9号, 第10号 (DVD)  
 新國學 14  
 西山学苑研究紀要 12  
 仙石山仏教学論集 9  
 蔵学学刊 1, 2, 4, 5, 7-14  
 大正大学綜合佛教研究所年報 39  
 臺大佛學研究 32, 33  
 筑紫女学園大学研究紀要 12  
 中華佛學學報 30  
 中國俗文化研究 13  
 中國佛學 = The Chinese Buddhist Studies 28-40  
 哲学・思想論集 42  
 天台学報 58  
 東京文化財研究所概要 2017  
 東方 32  
 東方學 133, 134  
 東方學報 91  
 東方學會報 112, 113  
 同朋大学佛教文化研究所紀要 36  
 同朋大学佛教文化研究所所報 30  
 同朋大学論叢 101  
 同朋佛教 51-53  
 東洋学術研究 56/1, 2  
 東洋思想文化 4  
 東洋哲学研究所紀要 33  
 東洋の思想と宗教 34  
 東洋文化研究所紀要 170, 171  
 敦煌寫本研究年報 11  
 成田山仏教研究所紀要 40  
 南山宗教文化研究所研究所報 27  
 二松学舎大学大学院紀要・二松 31  
 二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊 47  
 二松學舎大學論集 60  
 日蓮学 1  
 日本古写經研究所研究紀要 2  
 長谷川仏教文化研究所年報 41  
 比較論理学研究 14  
 東アジア仏教学術論集: 韓・中・日国際仏教学術大会論集 5  
 東アジア仏教研究 15  
 法鼓佛學學報 20  
 佛教學研究 73  
 佛教大学大学院紀要 教育学研究科篇 45  
 佛教大学大学院紀要 社会学研究科篇 45  
 佛教大学大学院紀要 社会福祉学研究科篇 45  
 佛教大学大学院紀要 文学研究科篇 45  
 佛教大学仏教学会紀要 22
- 駒澤大学仏教学部  
 三康文化研究所  
 三康文化研究所  
 四天王寺大学図書館  
 知恩院浄土宗学研究所  
 浄土真宗本願寺派総合研究所  
 創価大学シルクロード研究センター  
 四川大學中國俗文化研究所  
 京都西山短期大学  
 国際仏教学大学院大学  
 四川大学中国蔵学研究所  
 大正大学綜合佛教研究所  
 國立臺灣大學圖書館  
 筑紫女学園大学附属図書館  
 法鼓文理學院  
 四川大學中國俗文化研究所  
 中国佛学院  
 筑波大学人文社会科学研究科哲学・思想専攻  
 叡山学院  
 国立文化財機構 東京文化財研究所  
 中村元東方研究所  
 東方学会  
 京都大学人文科学研究所  
 東方学会  
 同朋大学佛教文化研究所  
 同朋大学佛教文化研究所  
 同朋大学社会福祉学部研究室  
 同朋大学仏教学会  
 東洋哲学研究所  
 東洋大学文学部  
 東洋哲学研究所  
 早稲田大學東洋哲學會  
 東京大学東洋文化研究所  
 京都大學人文科學研究所  
 成田山仏教研究所  
 南山宗教文化研究所  
 二松學舎大學大学院文学研究科  
 二松學舎大學東アジア学術総合研究所  
 二松學舎大學文学部  
 身延山大学国際日蓮学研究所  
 国際仏教学大学院大学日本古写經研究所  
 淑徳大学長谷川仏教文化研究所  
 広島大学比較論理学プロジェクト研究センター  
 東洋大学東洋学研究所  
 東アジア仏教研究会  
 法鼓文理學院  
 龍谷大学仏教学会  
 佛教大学大学院  
 佛教大学大学院  
 佛教大学大学院  
 佛教大学大学院  
 佛教大学仏教学会

佛教大学仏教学部論集 101	佛教大学仏教学部
佛教大学文学部論集 101	佛教大学文学部
佛教大学法然仏教学研究センター紀要 3	佛教大学法然仏教学研究センター
佛教大学歴史学部論集 7	佛教大学歴史学部
佛教図書館館刊 61	伽耶山基金會圖書資訊中心
佛教文化研究 61	浄土宗教学院
佛教文化研究論集 18, 19	東京大学仏教青年会
佛教論叢 61	浄土宗教学院
佛光學報 新三卷第一期	佛光大學佛教研究中心
法華文化研究 42	立正大学法華經文化研究所
待兼山論叢 50	大阪大学大学院文学研究科
南アジア古典学 12	九州大学大学院人文科学研究院
身延山大学東洋文化研究所所報 20	身延山大学国際日蓮学研究所
身延論叢 22	身延山大学仏教学会
民博通信 156-159	国立民族学博物館
武蔵野大学仏教文化研究所紀要 33	武蔵野大学仏教文化研究所
龍谷大学佛教学研究室年報 21	龍谷大学佛教学研究室
論叢 アジアの文化と思想 25	早稲田大学文学学術院東洋哲学研究室 アジアの文化と思想の会

## 執筆者紹介 [Contributors to this Issue]

James B. APPLE	Associate Professor, University of Calgary, CANADA
Jens BRAARVIG	Professor, Norwegian Institute of Philology, The Norwegian Academy of Science and Letters, Oslo University, NORWAY
DHAMMADINNA	Āgama Research group director, Dharma Drum Institute of Liberal Arts, Taiwan
Harry FALK	Professor Emeritus, Free University of Berlin, GERMANY
FAN Jingjing (范晶晶)	Research Fellow, Research Center of Eastern Literature, Peking University, CHINA
HAN Jaehee	Ph. D. candidate, Dongguk University and Oslo University, NORWAY
Oskar von HINÜBER	Professor Emeritus, University of Freiburg, GERMANY
Petra KIEFFER-PÜLZ	Research Fellow, Academy of Sciences and Literature, Mainz, GERMANY
Jirō HIRABAYASHI (平林 二郎)	Research Fellow, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, Tokyo
Isao KURITA (栗田 功)	Eurasian Art, Tokyo
LEE Hyebin	Ph. D. candidate, Dongguk University and Oslo University, NORWAY
LEE Youngjin	HK Professor, Geumgang Center for Buddhist Studies, Geumgang University, KOREA
Weerachai LEURITTHIKUL	Ph. D. candidate, Dhammachai International Research Institute (DIRI) and Oslo University, NORWAY
Li Can (李 燦)	Lecturer, School of Asian and African Studies, Beijing Foreign Studies University, CHINA
Li Xuezhu (李 学竹)	Research Associate, China Tibetology Research Center, CHINA
Katarzyna MARCINIAK	Postdoctorate Researcher, Research Centre of Buddhist Studies Warsaw University, POLAND
Jundō NAGASHIMA (長島 潤道)	Lecturer, Taishō University, Tokyo
SAERJI (薩爾吉)	Associate Professor, Peking University, CHINA
Peter SKILLING	Maître de conférences, École française d'Extrême-Orient, Bangkok and Paris, THAILAND
Nicholas SIMS-WILLIAMS	Professor Emeritus, SOAS, University of London, U.K.
Ursula SIMS-WILLIAMS	Lead Curator, The British Library, U.K.
Martin STRAUBE	Associated scholar, Philipps-Universität Marburg, GERMANY
Katsumi TANABE (田辺 勝美)	Independent Researcher of Gandharan Art, Tokyo
Tatsushi TAMAI (玉井 達士)	Visiting Researcher, IRIAB, Soka University, Tokyo
Peter ZIEME	Professor Emeritus, Free University of Berlin, GERMANY
Seishi KARASHIMA (辛嶋 静志)	Director/Professor, IRIAB, Soka University, Tokyo
Noriyuki KUDO (工藤 順之)	Professor, IRIAB, Soka University, Tokyo

## 編集後記 (Editorial Postscript)

本誌第21号をお届けします。今号は30篇の論文を掲載することが出来ました。紙面の都合上、それぞれのご論攷についてその内容を紹介することは割愛させて頂きますが、ご多忙の中、執筆頂いた諸先生方にあらためてお礼申し上げます。

**研究所出版物について** 今年度は年報に加え、昨年に引き続き、インド国立公文書館所蔵ギルギット写本写真版シリーズの第2巻「大乘仏典」第3分冊として、『三昧王経（月灯三昧経）』（Samādhirājasūtra）の写真版を出版いたします。この経典のギルギット写本はサンスクリット本の中で最も古いもので、残念ながら一部欠けている所もありますが、後世のネパール等で見出された写本とは異なる内容を伝えています。今回は現存する164葉全てをカラーで出版いたします。また、サンスクリットテキスト、漢訳・チベット訳（4種）との対応表も附してあります。入手方については、国内からの申込みの場合、研究所ウェブサイトの出版物のページから申込書をダウンロードした後、必要事項を記入の上、本研究所までご返送いただきましたら、こちらから料金着払いにて当該出版物をお送りしております。国外からの申込みの場合のみ、郵送費をウェブ上で決済していただくこととなりますが、詳しくはお申し込みされてからお知らせ致します。いずれも残部僅少の場合には発送できないこともあります。どうぞ予めご了承くださいませようお願いいたします。

**研究所より** 研究所の日々の活動は、事務全般担当の松井博子さん、高柳さつきさん、五十嵐裕子さん、蔵書管理の佐々木一憲さん、森富士子学事部副部長、そして多くの留学生・学生諸氏の献身的な協力に支えられております。特に今年度末で退職される松井さんには一方ならぬご尽力をいただきましたこと、心より感謝いたします。また理事長、学長をはじめ、研究所運営委員会委員長・神立孝一副学長、大学理事会、学事部・近藤部長、そして多くの関係部署、学外の各機関からの様々な支援の下、研究所は運営されております。我々の研究と活動を支えて下さる多くの方々にこの場を借りて深くお礼申し上げます。今後も、いま以上の成果を挙げられるように精進して参りたいと存じます。

(8, 3. 2018/N.K.)

『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』（平成29年度）第21号

2018年3月31日発行

編集主幹 工藤順之  
発行所 創価大学・国際仏教学高等研究所 (所長・辛嶋静志)  
〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236  
Tel: 042-691-2695, Fax: 042-691-4814  
E-mail: [iriab@soka.ac.jp](mailto:iriab@soka.ac.jp); URL: <http://iriab.soka.ac.jp/>  
印刷所 清水工房  
〒192-0056 東京都八王子市追分町 10-4-101  
Tel: 042-620-2626, Fax: 042-620-2616

*Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology  
at Soka University for the Academic Year 2017, Vol. XXI (2018)*

Editor-in-Chief: Noriyuki KUDO  
Published on 31 March 2018  
by The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University:  
1-236 Tangi, Hachioji, Tokyo 192-8577, JAPAN  
Phone: +81-42-691-2695 / Fax: +81-42-691-4814  
E-mail: [iriab@soka.ac.jp](mailto:iriab@soka.ac.jp); URL: <http://iriab.soka.ac.jp/>

Printed by Simizukobo, Co.Ltd., Hachioji, Tokyo, JAPAN

ISSN 1343-8980

Correspondence regarding all editorial matters and acknowledgements of monographs and the Annual Report, including manuscripts to be offered for publication, may be addressed to the Editor-in-Chief of this issue, in care of the International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.

---

略号提案：

(創大)仏高研年報 = 創価大学・国際仏教学高等研究所・年報

Suggested Abbreviation:

*ARIRIAB = Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology*

**New Publication / 新刊案内**

**GILGIT MANUSCRIPTS  
IN THE NATIONAL ARCHIVES OF INDIA  
(= GMNAI)**

General Editors:  
Oskar von HINÜBER / Seishi KARASHIMA / Noriyuki KUDO

**Volume II.3**

***Samādhirājasūtra***

**Edited by**

**Noriyuki KUDO,  
Tananori FUKITA and Tomonori TANAKA**

Published by  
The National Archives of India (New Delhi, INDIA)  
and  
The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Tokyo, JAPAN)

xvii pages + 164 plates

ISBN 978-4-904234-16-7

-----oOo-----

Obtainable on request  
Please visit our website:  
<http://iriab.soka.ac.jp/>

## PLATES

O. VON HINÜBER: The Bronze of Pekapharṇa	PLATES	1–2
O. VON HINÜBER: A second Copper-Plate Grant of King Subandhu	PLATE	3
H. FALK: A standing bronze Buddha in Gupta style from the north-western Himalaya	PLATES	4–5
J. BRAARVIG, HAN, LEE, LEURITTHIKUL: A synonym lexicon similar to the <i>Amarakośa</i>	PLATE	6
N. SIMS-WILLIAMS: From philology to history: Deciphering the language of ancient Afghanistan	PLATES	7–8
P. ZIEME: <i>Gāthās</i> of the lost <i>Jinhuachao</i> 金花抄 in Old Uigur translation	PLATES	9–10
K. TANABE: Not <i>Bēnzhi</i> / <i>Bēnshí</i> (賁識, 奔識) but <i>Vaiśravaṇa</i> / <i>Kuvera</i> (毘沙門天)	PLATES	11–16
I. KURITA: A Panel depicting a King of Kushan	PLATES	17–19